

まつ お じょう い せき
松 尾 城 遺 跡

2005年3月

長野県飯田市教育委員会

まつ お じょう い せき
松 尾 城 遺 跡

2005年3月

長野県飯田市教育委員会

序

私たちの飯田市は、美しい自然に恵まれ、長い歴史と尊い伝統文化につつまれた人情豊かなまちとして知られており、市民憲章では「伝統を生かし、文化の香り高い飯田市をつくります」と宣言しています。松尾地区は飯田市のほぼ中央に位置し、重要文化財木造誉田別尊坐像が納められている鳩ヶ嶺八幡宮や長野県史跡代田山狐塚古墳をはじめ多くの文化財に恵まれ、文化の息吹きが感じられます。また、古来交通の要衝に位置し、中世にあっては信濃国守護職小笠原氏が松尾城に居を構える等、政経の中心として重要な役割を果たした地域です。

多くの地方都市にみられるように、飯田市でも近年主要幹線道路の整備とともに市街地が拡大し、店舗・事業所が郊外に移転するなど、中心市街地の空洞化が深刻な問題となっています。松尾地区もこうした市街地化の波に早くから呑み込まれた地域の一つで、宅地化が著しく進行しています。その結果園児や学童が増加し、殊に小学校では校舎の増築が緊急の課題となっていました。今回の工事はゆとりある教育環境の実現を図るもので、その事業実施はやむを得ないものでした。また、市立松尾保育園園庭の擁壁工事についても、隣接地への擁壁倒壊を防ぐとともに、園児の安全を確保するために必要な工事がありました。

しかし、一方で今回二つの工事が計画されましたところは、埋蔵文化財包蔵地の松尾城遺跡の一画です。松尾城遺跡は、平成元年度に松尾公民館建設に先立ち発掘調査が実施され、弥生時代後期から古墳時代前期のムラのあとが見つかっています。今回の発掘調査でもこの時代の墓がひしめきあっている様子が明らかになりました。また、今から4500年ほど前の縄文時代の土器なども見つかり、調査部分の北東側にこの時代のムラが広がっているらしいことがわかつてきました。新たな知見が加わり、先人たちの暮らしざまの一端が解き明かされたことに、新鮮な感動を覚えます。

たゆみない文化財保護活動により、このような地域の歴史が次第に明らかになりつつありますが、調査記録をとどめた本報告書が活用されてはじめて、地区および市域の方々の財産として生命を与えられることになります。また、そうなることを切に望む次第です。

最後になりましたが、文化財保護の本旨にご理解を賜りご協力いただきました地元関係者の皆様、ならびに発掘調査に従事された方々に深甚なる感謝を捧げまして発刊の辞いたします。

平成17年3月

長野県飯田市教育委員会

教育長　富　田　泰　啓

例 言

1. 本書は飯田市起業の飯田市立松尾小学校校舎増築工事および市立松尾保育園の園庭擁壁工事に先立って実施された、長野県飯田市松尾城3800-1および5155所在の松尾城遺跡の緊急発掘調査報告書である。
2. 調査は飯田市教育委員会が直営実施した。
3. 調査は、小学校校舎増築地点については平成15年度に現地作業、同16年度に整理作業及び報告書作成作業を、保育園園庭地点については同16年度に現地作業から報告書作成作業までを行った。
4. 調査実施にあたり、基準点設置測量を株式会社ジャステックに委託実施した。
5. 発掘作業・整理作業にあたり、遺跡略号 J Y O に地番を付し、小学校校舎増築地点は J Y O 3800-1、保育園園庭地点については J Y O 5155 を一貫して用いた。
6. 本報告書では以下の遺構略号を使用している。
竪穴 - S B、方形周溝墓 - S M、土坑 - S K
7. 本書の記載順は地点別・遺構別を優先し、遺構図は挿図とした。
8. 土層の色調については、『新版標準土色帖』の表示に基づく土色計（第一合成株式会社製、S C R - 1）を用い、マンセル表示で示した。
9. 本書に関わる図面の整理は、調査員・整理作業員の協力により馬場保之が行なった。
10. 本書の執筆と編集は馬場が行なった。
11. 遺構・遺物の調査・記述・表現方法については、『開善寺境内遺跡』（飯田市教委 2002）・『羽場曙遺跡・方角東遺跡』（同 2003 a）・『城陸遺跡』（同 2003 b）に準拠した。
12. 本書に関連した出土遺物および図面・写真類は飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館・飯田市上郷考古博物館に保管している。

本文目次

序

例言

目次

第Ⅰ章 経過	1
第1節 調査の経過	1
(1) 小学校校舎増築地点の調査	1
(2) 保育園園庭地点の調査	1
(3) 整理作業	2
第2節 調査組織	2
(1) 調査団	2
(2) 指導	2
(3) 事務局	2
第Ⅱ章 遺跡の環境	3
第1節 自然環境	3
第2節 歴史環境	3
第Ⅲ章 調査結果	9
第1節 調査区の設定	9
第2節 基本層序	9
第3節 小学校校舎増築地点の遺構と遺物	9
(1) 竪穴	9
(2) 方形周溝墓	11
(3) 土坑	18
(4) その他	20
(5) 遺構外出土遺物	20
第4節 保育園園庭地点の遺構と遺物	20
第Ⅳ章 総括	21
引用参考文献	22
報告書抄録	41

挿図目次

挿図 1 調査遺跡および周辺遺跡位置図	4
挿図 2 調査地点位置図	6
挿図 3 基準メッシュ図区画調査位置	8
挿図 4 小学校校舎増築地点遺構全体図、基本層序、S B14・S B15	10

挿図 5	S M03・S M04	12
挿図 6	S M05・S M06	14
挿図 7	S M07	15
挿図 8	S M08・S M09、S K11・S K13～S K17	16
挿図 9	S K18・S K20・S K21・S K23～S K31	17
挿図10	S K32～S K39	18
挿図11	周辺柱穴平面図	19
挿図12	保育園園庭擁壁工事地点遺構全体図	20

図版目次

第1図	松尾城遺跡出土遺物（1）	25
第2図	松尾城遺跡出土遺物（2）	26
第3図	松尾城遺跡出土遺物（3）	27

表目次

第1表	遺構観察表	24
第2表	石器観察表	28

写真図版目次

図版 1	調査区全景 S B14	31
図版 2	S M03 同主体部 S M04	32
図版 3	S M05他 S M06 S M08	33
図版 4	S M09 S K16 S K17	34
図版 5	S K26 S K33 発掘作業風景	35
図版 6	発掘作業風景 S B14	36
図版 7	S B14	37
図版 8	S M03・S M06 遺構外	38
図版 9	S K40	39

第Ⅰ章 経 過

第1節 調査の経過

(1) 小学校校舎増築地点の調査

平成15年度に飯田市教育委員会学校教育課より飯田市立松尾小学校の校舎増築工事計画が提示され、15年10月10日に土木工事等のための埋蔵文化財発掘の通知書が提出された。当松尾地区は近年急速に宅地化が進行し、保育所や小・中学校が手狭となり、増改築等その施設整備が急務となっていた。本事業は、鉄筋コンクリート2階建ての校舎を1棟建設し、教室不足の解消を図るものであった。

一方で、当該地は埋蔵文化財包蔵地松尾城遺跡の一画に位置し、平成元年度に松尾公民館建設に先立ち発掘調査を実施した地点と近接する位置にある。その調査では、弥生時代後期の竪穴住居址2棟・方形周溝墓2基、古墳時代前期の竪穴住居址9棟等が調査されている。ただ、当該地には以前保育園や給食室があり、その基礎や解体時の搅乱が著しく、遺構・遺物が良好に遺存していないのではないかと考えられた。そこで、まず試掘調査を行い、遺構・遺物の遺存状況を確認することとなった。

平成16年1月7日、松尾城遺跡の試掘調査に着手した。重機により建物建設位置に2本の試掘トレーナーを入れ、遺構確認を行った。その結果、方形周溝墓の周溝や土坑が確認され、遺構が比較的良好に遺存していることから、引き続き発掘調査に移行し記録保存することになった。重機により表土を除去した後、14日より作業員を入れて、遺構検出作業、同掘り下げを行い、検出・調査された遺構について写真撮影・測量作業を実施し、1月21日現地作業を終了した。なお、飯田市埋蔵文化財基準メッシュ図に基づく測量調査を株式会社ジャステックに委託実施した。調査期間中の1月20日には松尾小学校6年生の総合学習の一環として、児童の見学・学習の場を提供した。その後、飯田市考古資料館において、出土遺物や現地で記録された図面・写真類の基礎的な整理作業を行った。

(2) 保育園園庭地点の調査

平成16年8月12日に飯田市保健福祉部児童課より市立松尾保育園園庭の擁壁改修工事について、土木工事等のための埋蔵文化財発掘の通知書が提出された。既存の擁壁の一部に亀裂が生じており、倒壊して壁下の民地に被害を及ぼすことがないよう、早急な改修を要するものであった。また、園児の安全確保の面からも工事実施は不可欠と判断された。当該地は段丘縁辺部にあたり、すでに保育園建設に際して盛り土造成が大規模に行われており、地形の旧状は相当急な斜面であったことが窺えた。一方で、当該地は平成15年度に実施した小学校校舎増築工事地点と近接しており、上述の地形的な特徴を考慮してもなお、縄文時代中期の居住域や、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての墓域の一画にあたる可能性が高いと判断された。児童課と市教育委員会で二者協議を重ねた結果、運動会実施と遊具の一時撤去を待って試掘調査を実施し、その結果に基づいて改めて協議することになった。

10月22日試掘調査に着手した。重機により擁壁に平行するトレーナーを2本設定し、掘削を行った。遺構の検出を行ったところ、1トレーナーは約1/2に搅乱がおよんでおり、また2トレーナーから南側は既に造成により削平を受けていることが判明した。そこで検出遺構について掘り下げ、写真撮影・測量作

業の後、埋め戻して同日現地作業を終了した。

(3) 整理作業

平成16年度に、飯田市考古資料館において、出土遺物の水洗・注記・接合・復元作業、遺物の実測・拓本とり、遺構図等の作成・トレース作業、写真類の整理、版組み、執筆・編集等整理作業を行い、本発掘調査報告書作成作業にあたった。

第2節 調査組織

(1) 調査団

調査主体者 飯田市教育委員会 教育長 富田泰啓
調査担当者 馬場保之・羽生俊郎・下平博行・佐々木嘉和
調査員 渋谷恵美子・吉川金利・坂井勇雄
作業員 伊藤孝人 尾曾ちぶき 金井照子 木下早苗 木下力弥 熊崎三代吉
小平まなみ 小林定雄 佐々木一平 下田英美子 杉山春樹
高橋セキ子 竹本常子 橘 千賀子 服部光男 林 員子 樋本宣子
牧内 修 松下成司 松本恭子 三浦照夫 宮内真理子 森藤美知子
吉川悦子

(2) 指導 長野県教育委員会

(3) 事務局 飯田市教育委員会

尾曾幹男 (教育次長)
小林正春 (生涯学習課長)
吉川 豊 (生涯学習課文化財保護係長)
馬場保之 (" 文化財保護係)
渋谷恵美子 (" ")
佐々木行博 (" ")
吉川金利 (" " " ~平成16年3月)
羽生俊郎 (" " " ")
下平博行 (" " " " 平成16年4月~)
坂井勇雄 (" " " " ")

第Ⅱ章 環 境

第1節 自然環境

飯田市松尾地区は、飯田市街地から南東に約2～5kmに位置し、飯田市全域から見ればほぼ中央部にあたる。東は天竜川を挟み下久堅地区に、北は松川で上郷地区と境を接する。南は毛賀沢川を挟み竜丘地区となり、西は河岸段丘上で鼎地区と接する。

伊那谷の基本的な地形は、天竜川の流れに沿ったほぼ南北方向への断層段丘地形を特徴としている。飯田市は赤石山脈と木曽山脈に挟まれた伊那谷の南端にあたり、両山脈の間を天竜川が南流する。天竜川による典型的な河岸段丘が見られるとともに、山脈の形成に関わる断層地塊運動に伴い盆地・大きな段丘崖が形成されており、複雑な段丘地形を呈している。

松尾地区はこの天竜川が東端を南流し、その氾濫原を含め5～6の段丘面で形成されている。それらは、中位と低位とに大別でき、その境は鳩ヶ峯八幡宮の社叢を中心とした段丘崖である。この段丘崖も小河川によりいくつかに開析され、北から南に、上の城・茶柄山、妙見山、八幡山、代田山、御射山原、松尾城跡とそれぞれに名前が付いている。

中位段丘の標高は480m前後でローム層に覆われた台地である。低位の段丘は前述の段丘崖下から天竜川までの間の松尾地区の大半である。この中に4面の小段丘があり、それぞれ2～5mの比高差がある。標高は380～430m程度である。それぞれの段丘面の広さは一様ではないがいずれも南北方向の段丘崖が確認でき、段丘崖直下には湿地帯が広がる場合が多い。しかし、中位段丘を開析する小河川が小扇状地を形成している箇所もあり、その部分では段丘崖の把握は困難となっている。また、これらの河川や段丘崖下の湧き水により、低位段丘は全体に水利は良い。明河原付近は天竜川の氾濫原で、北側の妙前・新井付近に天竜川支流松川の自然堤防が形成されており、内湾状を呈している。

気候面でみれば、伊那谷は比較的温和であり、松尾地区は飯田市の中でもさらに温暖である。平均気温は、13°Cに近く、降水量も年間1,600mm程度である。低位段丘は、後ろに段丘崖を背負っているため、冬の北風から守られる格好になっていることも要因のひとつにあげられる。

松尾城遺跡は天竜川沿いに展開する低位段丘I桐林面の段丘縁辺部に位置している。

第2節 歴史環境

松尾地区の遺跡を概観すると、天竜川氾濫原及び段丘崖を除いてほぼ全域が包蔵地である。地区内の埋蔵文化財発掘調査は近年になって増加し、各時代の様相が少しずつ明らかになってきている。

松尾地区の歴史を概観すると、縄文時代以前の遺構・遺物は中・低位段丘では断片的に報告されているにすぎない。上溝遺跡（下伊那誌編纂會 1991）では縄文時代草創期の有舌尖頭器が、明集会所付近（八幡 1972他）・寺所遺跡（飯田市教委 1999）では早期前半の押型文土器が出土しており、上郷・座光寺地区と同様、相当早くからこうした低地で人々が生活した様子が確認できる。妙前遺跡（同



- 1. 松尾城遺跡 2. 寺所遺跡 3. 妙前大塚古墳 4. 妙前遺跡
- 5. 羽場獅子塚古墳 6. 姫塚古墳 7. 上溝遺跡・上溝天神塚古墳 8. おかん塚古墳 9. 上の城城跡
- 10. 久井遺跡 11. 松尾北の原遺跡・御射山獅子塚古墳・茶柄山古墳群 12. 猿小場遺跡 13. 物見塚古墳
- 14. 八幡原遺跡・妙見山古墳 15. 八幡山古墳 16. 代田山狐塚古墳 17. 代田獅子塚古墳 18. 清水遺跡
- 19. 田圃遺跡 20. 御射山遺跡 21. 松尾南の原遺跡 22. 松尾城跡 23. 橘山窯跡 24. 鈴岡城跡

挿図 1 調査遺跡および周辺遺跡位置図

2001b) では中期後葉の集落の一画が調査されているし、田圃遺跡では同期と考えられる小竪穴が調査されている(同 1993a)。これに対して、中位段丘上の遺跡では、それよりも古い旧石器時代の遺物の出土が報告されている。猿小場遺跡(同 1980)ではナイフ形石器、八幡原遺跡(同 1992a)では彫器が出土している。また、縄文時代前期の八幡原遺跡では竪穴住居址・土坑が確認されているし、中期の遺構が猿小場遺跡にある。しかし、後期・晚期についてはいまだ報告がされていない。

弥生時代では、中期前半の寺所式の標式遺跡、寺所遺跡(神村 1967)が著名である。さらに後期には低位段丘上で本遺跡(同 1991a)をはじめ、妙前遺跡・清水遺跡(同 1976・1991b)・田圃遺跡(同 2000a)が調査されている他、猿小場遺跡・松尾北の原遺跡(同 1996・2000b)等中位段丘上への進出がみられる。

古墳時代前期には、本遺跡・清水遺跡など前時代から継続した集落の姿がある。古墳時代後期の集落址は、妙前遺跡・久井遺跡(同 1993b)・上溝遺跡・田圃遺跡など調査例は少ないが、現存する古墳の数から推察すればかなりの規模の集落が複数あったと考えるのが妥当である。

松尾地区に現存する古墳の数は、竜丘地区・座光寺地区と並んで多い。松尾地区にある古墳の中で最も古い古墳は、代田山に現存する前方後方墳、長野県史跡代田山狐塚古墳(同 1994)である。長野県内最古に属する古墳で、県内ではほぼ同時期に古墳が築造され始めたことが判ってきている。土器などの流れからみると、南信地方は弥生時代後期から東海地方との交流が活発になってきたようで、さらに弥生時代の終末にかけて全県下へと交流が拡大していく。こうした時代的な背景のもとに代田山狐塚古墳が築造されたと考えられる。続く5世紀代には、眉庇付冑が出土した妙前大塚(同 1972)、馬の副葬を伴う茶柄山古墳群など多くの古墳が築造される。地形と古墳群の関係をみると、中位段丘の縁辺には、帆立貝型古墳と見られる八幡山古墳、八幡原に物見塚古墳(同 1992b)・妙見山古墳(同 1992c)があった。八幡原の一段下位の北の原には、前方後円墳である御射山獅子塚古墳・茶柄山3号古墳とその周辺に点在する茶柄山古墳群がある。低位段丘Ⅱでは、天神塚古墳・おかん塚古墳・姫塚古墳・羽場獅子塚古墳の前方後円墳を中心とした上溝古墳群、代田獅子塚古墳を中心とした代田・上毛賀古墳群がある。低位段丘Ⅰでは、上溝古墳群の下位の妙前古墳群や水佐代・城古墳群、代田・上毛賀古墳群の下位に下毛賀古墳群があり、氾濫原を除く松尾地区全域に古墳が見られる。毛賀地区では、下毛賀1~7号古墳・張原古墳が知られているが(下伊那誌編纂會 1955)、いずれも現存していない。一方で、この時代には本遺跡・八幡原遺跡・寺所遺跡・田圃遺跡等で、方形周溝墓・円形周溝墓といった墳墓群が営まれている。特に上記各遺跡では、貼石をもつ方形周溝墓が確認されており、当時の墓制を研究する上で注目される。

奈良時代から平安時代にかけては、詳細時期ははっきりしないが、久井遺跡で2棟の掘立柱建物址が検出されている。もし、これが奈良時代のものとすれば、古代官衙址に関連する建物の可能性があり、伊那郡小村郷の郷庁もしくは東山道育良駅に比定することができるかもしれない。この他、猿小場遺跡・八幡原遺跡・妙前遺跡・田圃遺跡・清水遺跡等で、奈良・平安時代の遺構が確認されている。平安時代には、猿小場遺跡で25軒の住居址が調査され相当規模の大きな集落が営まれているし、清水遺跡でも住居址や掘立柱建物址が確認されている。毛賀御射山遺跡は、布目瓦や瓦塔片が出土しており(飯田市教委 1978)、古代寺院が存在した場所である。

中世には、松尾城跡を信濃守護職である小笠原氏が本拠としており、毛賀沢川を挟んで対峙する鈴岡



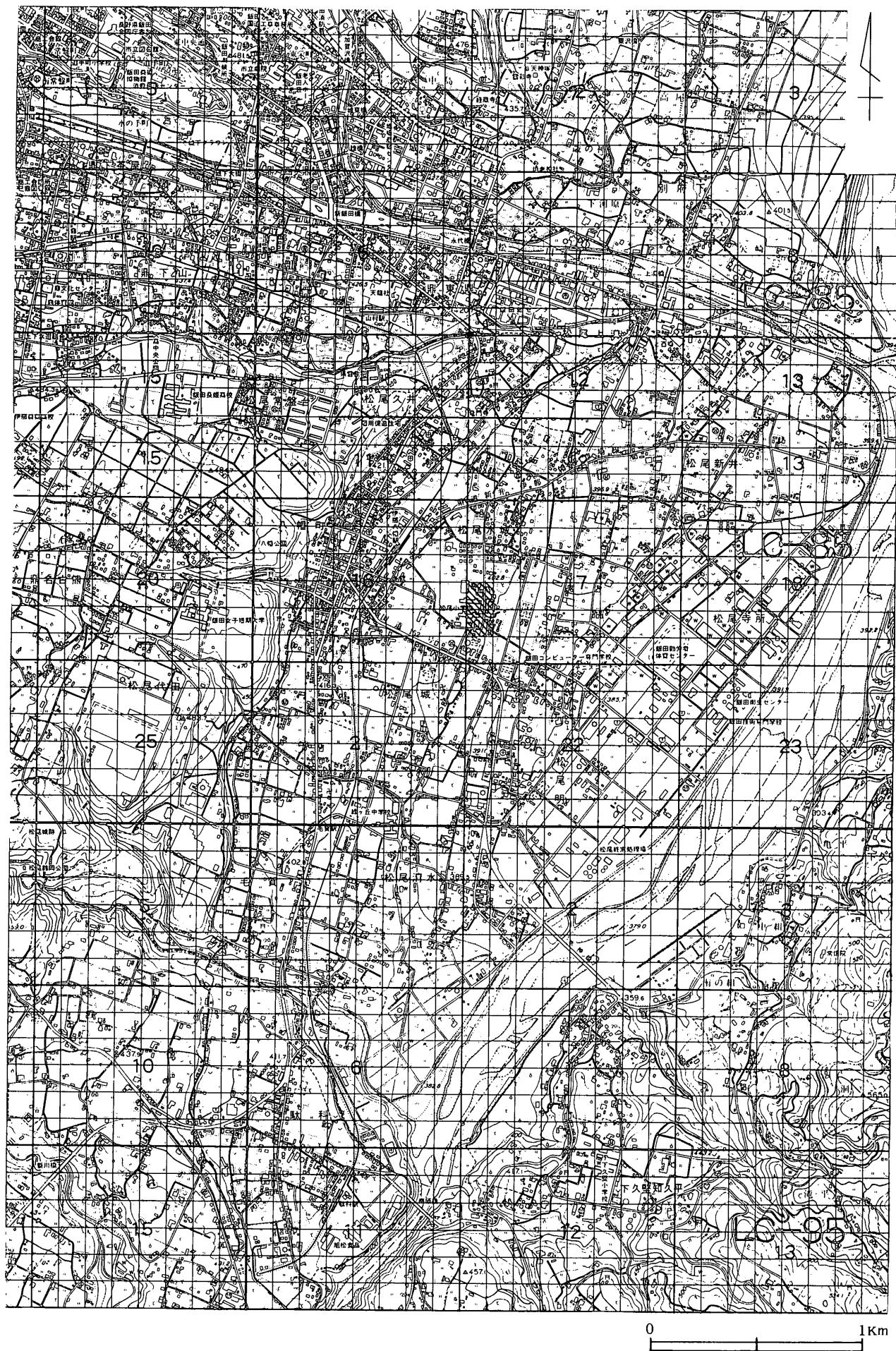
挿図2 調査地点位置図

城跡とともに、県の史跡に指定されている。さらに、城地籍には松尾城跡移動前の小笠原氏の居館跡があつたと言われている。松尾城跡や南の原遺跡では、陶磁器や建物址が確認されている（同 1974）。この他、調査された城跡として上の城城跡があり、土壘などが把握されたが、築造・廃絶の時期や城主などについては不明な点が多い。また、松尾北の原遺跡では中世から近代に至るまでの墳墓群が調査されている。

松尾地区の中央には、鬱蒼とした社叢に囲まれた鳩ヶ嶺八幡宮があり、鎌倉時代にはその名がみえる。八幡町はその門前町として発達してきた。本尊として奉られている誉田別尊坐像は重要文化財に指定されている。また、八幡町にはかつて街道が2本通っており、そのうち一本が秋葉街道と呼ばれるもので、武田信玄の遠州侵攻の際に整備されたものである。もう一本は遠州街道で、中馬道として江戸時代に発達した。この2本の街道の分岐点が鳩ヶ嶺八幡宮の前にあり、現在でも飯田市指定史跡の道標が立っており、交通の要所であったことを示している。

江戸時代末～明治時代初頭頃には地区内毛賀無常(淨)土地籍で陶器窯が開窯され、橘山窯と呼ばれている。中小形の碗・皿・鉢・擂鉢・壺・甕・瓶・土鍋・灯明具類等の日用雑器類が焼かれていたが、その操業期間については短期間であったと考えられる。灰釉・鉄釉が多用され、殊に灰釉はオリーブ色に発色するものが多い点に特徴がある（同 2005）。

松尾地区は、古代から近代に至るまでの飯田下伊那地方の政治・経済・文化の中心地の一つということができる。



挿図3 基準メッシュ図区画調査位置

第Ⅲ章 調査結果

第1節 調査区の設定

調査区の設定は、飯田市埋蔵文化財基準メッシュ図（以下、基準メッシュ図と略す。）に基づいて、株式会社ジャステックに委託実施した（設定方法については飯田市教育委員会 2003c 『辻前遺跡』他参照）。今次調査地点は、LC-85 17-25・33内に位置する（挿図3）。

なお、飯田市の埋蔵文化財基準メッシュ図は平成16年度から世界測地系に移行し飯田市新埋蔵文化財基準メッシュ図に改訂した。しかし、保育園の園庭擁壁工事部分については15年度調査分と併せて報告することを予定していたため、従前のメッシュ図に則って設定を行った。

第2節 基本層序（挿図4）

地表より60～100cmで地山である再堆積の砂質ロームに至る。南側ほど地山面は低くなる。I～III層に区分され、I層は造成土および旧表土を一括した。III層下面は地山と不連続面となっており、地山以上の相当部分が削平を受けていると判断された。II・III層は旧水田の耕土と考えられる。遺構は地山上面で検出された。

第3節 小学校校舎増築地点の遺構と遺物

(1) 竪穴

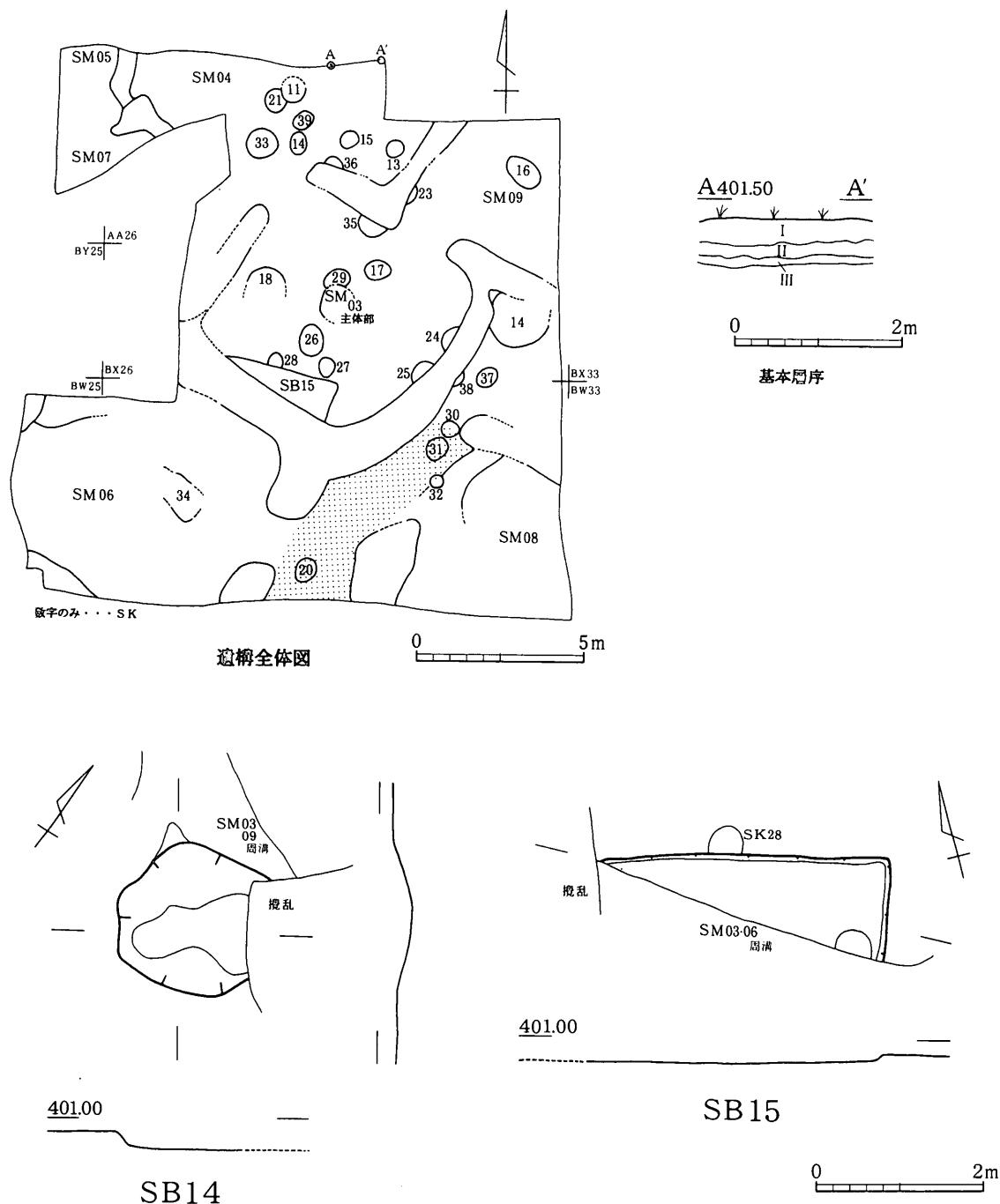
① S B 14（挿図4）

[検出位置] BX32他 [規模] (190) × 180m、深さ25cm [床面積] - m² [形態] 不整橙円形 [長軸] N 44° E [重複] SM03・SM09周溝に切られる [調査所見] やや広範囲から遺物が多出し、土坑より規模が大きいことから竪穴とした。炉などの諸施設は備えておらず、遺物の出土状況も1個体の土器がまとまっているという状況はないことから、廃棄のための坑と考えられる [埋土] 径10cm程度の円礫を多く含む [壁] だらだらと掘り窪む [床] 平坦でなく、硬い部分もない [周溝] なし [柱穴] なし [炉] なし [付属施設] なし [増改築] なし [床下検出遺構] なし [出土遺物] 遺物量は多く、縄文土器（第1図1～第2図2）・石器（第3図1～6）、土製円板（第2図15）がある。第1図2・6、6～9・16・17、13・14はそれぞれ同一個体である。打製石斧（第3図1）と横刃型石器のうち3～5は硬砂岩製、2と敲打器6は緑色岩製 [時期] 縄文時代中期中葉に比定される。

② S B 15 (挿図 4)

[検出位置] B W28他 [規模] -×-m、深さ12cm [床面積] - m² [形態] 方ないし長方形を呈すると考えられる [主軸] 北辺の方向N 78° W [重複] S M03・S M06の周溝に切られ、S K28と重複する

[調査所見] 僅かに地山と土色が異なり把握された。平面形から竪穴住居址の可能性も示唆されるが、床面や諸施設の状況から竪穴とした [埋土] 単層。自然埋没と考えられる [壁] 検出面から浅く、立ち上がりの状態は不明 [床] 硬い部分はない [周溝] なし [柱穴] 不明 [炉] 不明 [付属施設] 不明 [増改築] なし [床下検出遺構] 不明 [出土遺物] 僅少で詳細時期の判る遺物はない。横刃型石器（第3図7）は硬砂岩製 [時期] 形態や新旧関係から弥生時代の遺構と考えられるが、詳細は不明である。



挿図 4 小学校校舎増築地点遺構全体図、基本層序、S B 14・S B 15

(2) 方形周溝墓

① S M03 (挿図 5)

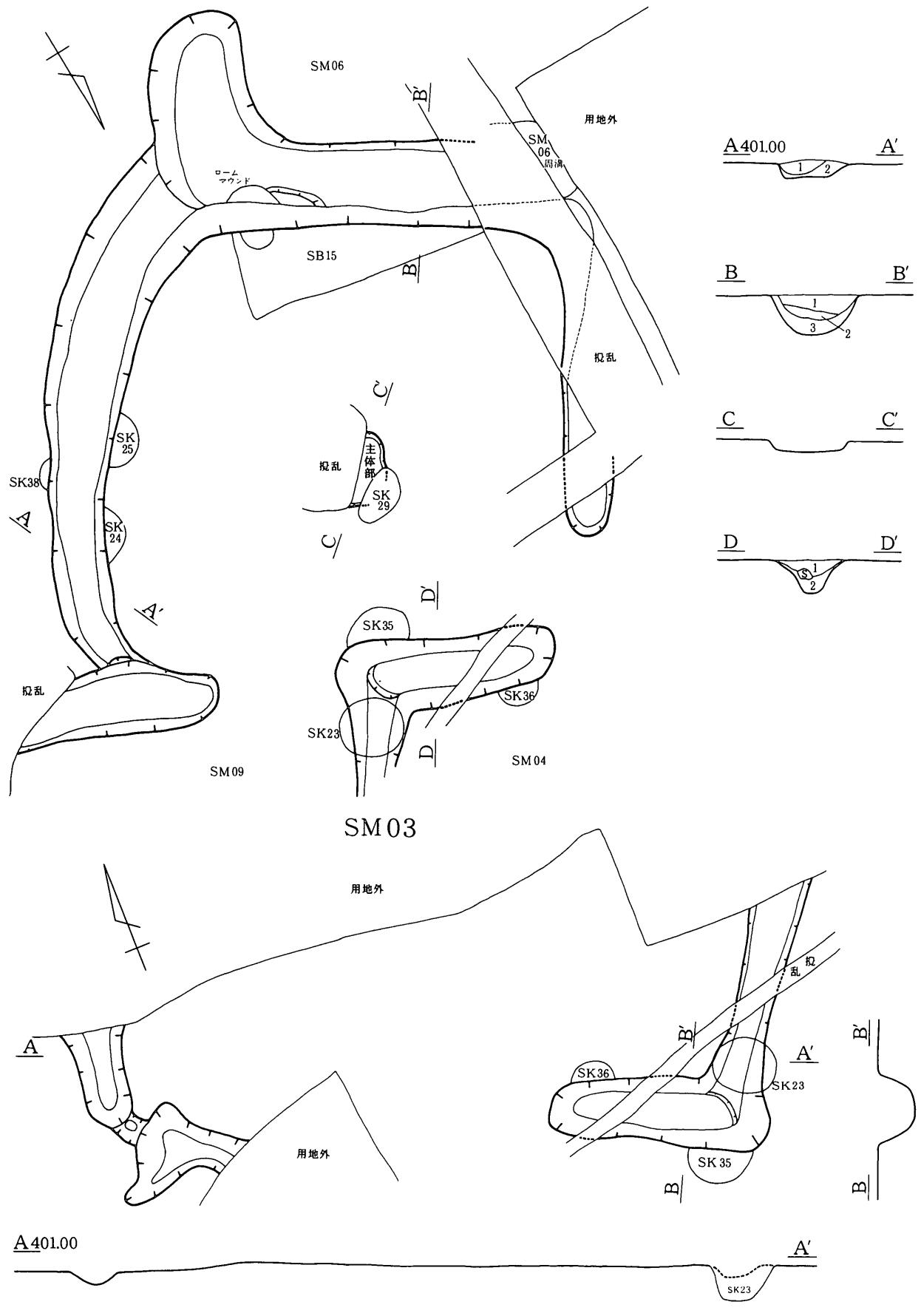
[検出位置] B Y29他 [重複] S M04・S M06・S M07・S M09と周溝を共有し、このうち S M06とは本址が古いと考えられる。また、S B14・S B15を切り、S K24・S K25・S K35・S K38と重複する [調査所見] S M06との新旧関係は、南西辺周溝の埋土3層が S M03部分に限られることから、S M03が古いと判断した。南東辺は外側に膨らむ [規模] 周溝内法6.6×6.5m、周溝外法8.2×8.2m [内法面積] 36.6m² [形態] 不整方形を呈する [主軸] N 146° W [周溝] [規模] 幅55～135cm、深さ18～56cm [断面形] S M04との共有部分は箱薬研状、他は半円形ないし逆台形を呈する [土橋部] 北東辺中央やや東寄りと、北隅の2箇所にあり [埋土の状況] 自然埋没 [出土遺物] 遺物量は僅少である。南東辺周溝から弥生時代後期の甕片が出土した。また、S M04との共有周溝から弥生時代後期の壺片・石核（硬砂岩）の他、径3～5cm程の硬砂岩・緑色岩の小礫がまとまって出土した。さらに、S M06との共有周溝から弥生時代後期の甕底部（第2図3）と同時期かと考えられる甕片、S M07と共有する周溝から弥生土器ないし土師器と考えられる壺小片が出土した [主体部] [有無] 有。撓乱に大部分が壊される [規模] 幅1.05×－m、深さ15cm [形態] 長方形を呈すると考えられる [壁] 上部を欠き、立ち上がりの状態は不明である [埋土の状況] 撓乱による破壊が大きく、埋戻しか自然埋没か把握できず [その他] [墳丘] 不明 [外表施設] なし [付属施設] なし [時期] 弥生時代後期に比定される。

② S M04 (挿図 5)

[検出位置] A C28他 [重複] S M03・S M09と周溝を共有する [調査所見] 1/2以上が調査区外にかかる。調査区壁での土層観察では、上部は相当削平を受けており、遺存状態は悪い [規模] 周溝内法(8.65) ×－m、周溝外法(10.8) ×－m [内法面積] － m² [形態] 方形を呈する [主軸] N 24° E [周溝] [規模] 幅50～100cm、深さ16～55cmで南西辺南側が深い [断面形] 逆台形ないし浅半円形で、S M03との共有部分は箱薬研状 [土橋部] 南西辺中央 [埋土の状況] 自然埋没 [出土遺物] 遺物量は僅少。S M03と共有する周溝から弥生後期壺・石核（硬砂岩）の他、径3～5cm程の硬砂岩・緑色岩の小礫がまとまって出土した。南東辺からは横刃形石器（硬砂岩）が出土した [主体部] [有無] 調査区内では把握できず [規模] 幅－×－m、深さ－cm [形態] 不明 [壁] 不明 [埋土の状況] 不明 [その他] [墳丘] 基本層序のとおり上部は削平されており、不明である [外表施設] なし [付属施設] 不明 [時期] 出土遺物から弥生時代後期と考えられる。

③ S M05 (挿図 6)

[検出位置] A C25他 [重複] S M04・S M07と重複する。東辺周溝を S M04と、僅かであるが南辺周溝を S M07と共有する [調査所見] 大部分が調査区外にかかる。周溝の検出部分が限られるが、他の周溝墓群が周溝を共有する状況や、東辺や南辺周溝とした溝の縁辺部が歪みをもち囲うような意図がみられることから、周溝墓と判断した。調査区際の断面観察から上部が大きく削平されている [規模] 周溝内法－×－m、周溝外法－×－m [内法面積] － m² [形態] 不整方形を呈すると考えられる [主軸] 東辺周溝の方向N 14° E [周溝] [規模] 幅60～85cm、深さ38cm [断面形] 東側に最深部が偏した逆三角形 [土橋部] 南辺周溝のやや東寄り [埋土の状況] 自然埋没 [出土遺物] 遺物は S M07との共



挿図5 SM03・SM04

有周溝から、混入の陶器擂鉢片の他、石器剥片があるのみである 【主体部】 [有無] 無 [規模] 幅-×-m、深さ- cm [形態] 不明 [壁] 不明 [埋土の状況] 不明 【その他】 [墳丘] 削平を受けて不明 [外表施設] なし [付属施設] 不明 [時期] 他の周溝墓と同様、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての周溝墓と考えられるが、遺物等なく詳細時期不明である。

④ S M06 (挿図6)

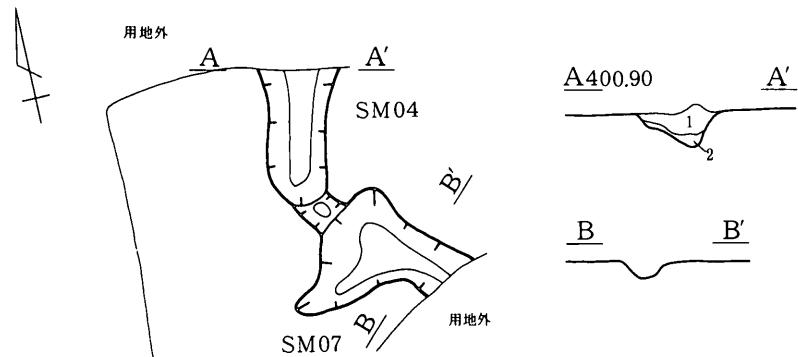
[検出位置] B V26他 [重複] S M03と周溝を共有するが、前述の通り S M03に切られると考えられる。撹乱により調査できなかったが、S M07とも周溝を共有すると考えられる [調査所見] 南東辺・北西辺の周溝は一部を把握したにとどまる [規模] 周溝内法7.2×6.8m、周溝外法9.6m以上×8.8m以上 [内法面積] 49.6 m² [形態] 方形を呈する [主軸] N 59° W [周溝] [規模] 幅120~150cm、深さ22~55cm [断面形] 逆台形 [土橋部] 南東辺中央やや東寄り [埋土の状況] 自然埋没と考えられる [出土遺物] 遺物量は僅少である。南東辺周溝から土師器片および硬砂岩素材の剥片、北西辺周溝から弥生時代後期の甕片が出土した。また S M03との共有周溝から弥生時代後期の甕底部(第2図3)が出土 【主体部】 [有無] 不明。S K34が主体部とも考えたが検出位置は土橋に近く、別遺構と判断 [規模] 幅-×-m、深さ- cm [形態] 不明 [壁] 不明 [埋土の状況] 不明 【その他】 [墳丘] なし [外表施設] なし [付属施設] なし [時期] 弥生時代後期あるいは古墳時代前期と考えられる。

⑤ S M07 (挿図7)

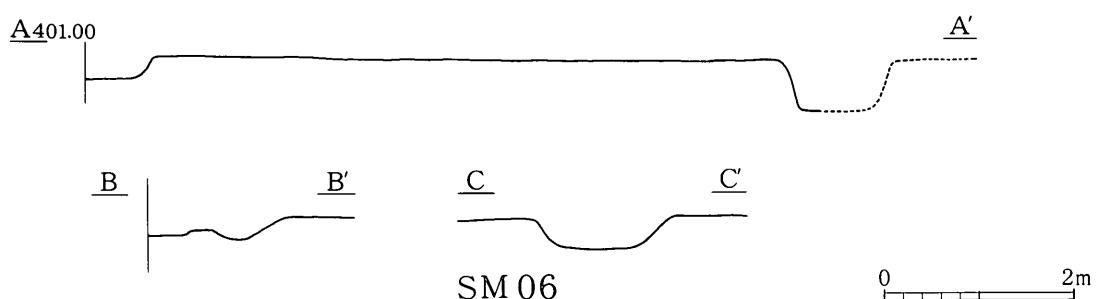
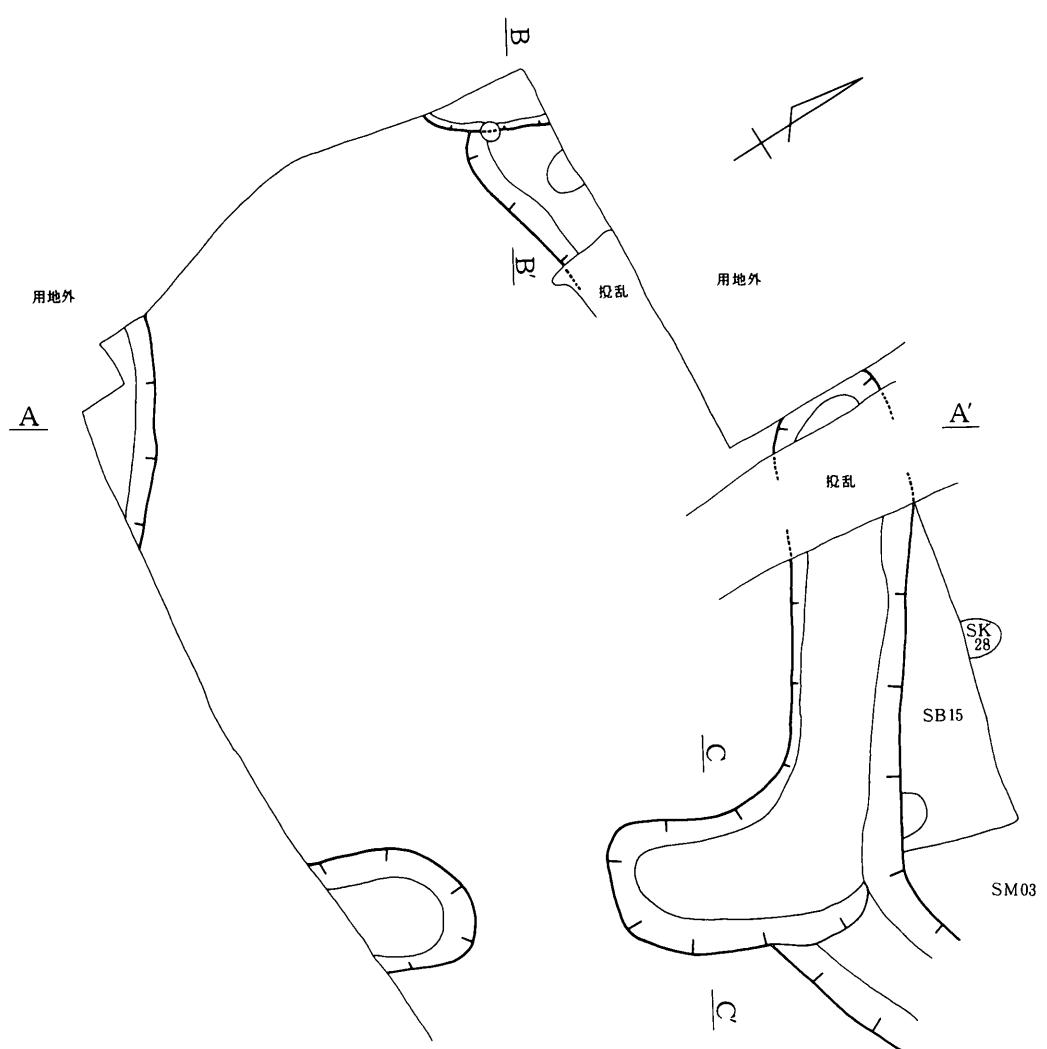
[検出位置] A A25他 [重複] S M03~S M05と重複する。南東辺周溝を S M03と、また北東辺周溝を S M04と、あまり明瞭でないが北西辺周溝を S M05と共有する [調査所見] 南東辺・北東辺は撹乱のため部分的に検出したにとどまる。南西辺は埋設物のため調査が困難で把握できず。断片的に周溝が把握されたにすぎないが、溝の形状から S M03の西側に接して周溝墓が構築されていると判断した [規模] 周溝内法 (4.2) × -m、周溝外法 (5.6) × -m [内法面積] - m² [形態] 方形を呈すると考えられる [主軸] 北東辺周溝の方向N 42° W [周溝] [規模] 幅55~70cm、深さ12~20cm [断面形] おおむね逆台形を呈する [土橋部] 北西辺中央付近と北東辺東側の少なくとも2箇所に設けられていたと考えられる [埋土の状況] 自然埋没 [出土遺物] 遺物は S M03と共有する周溝から弥生土器ないし土師器と考えられる壺小片、S M05との共有周溝から石器剥片と混入の陶器擂鉢片がある 【主体部】 [有無] 埋設物のため把握できず [規模] 幅-×-m、深さ- cm [形態] 不明 [壁] 不明 [埋土の状況] 不明 【その他】 [墳丘] 不明 [外表施設] なし [付属施設] 不明 [時期] S M05と同様、詳細時期不明であるが、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての周溝墓と考えられる。

⑥ S M08 (挿図8)

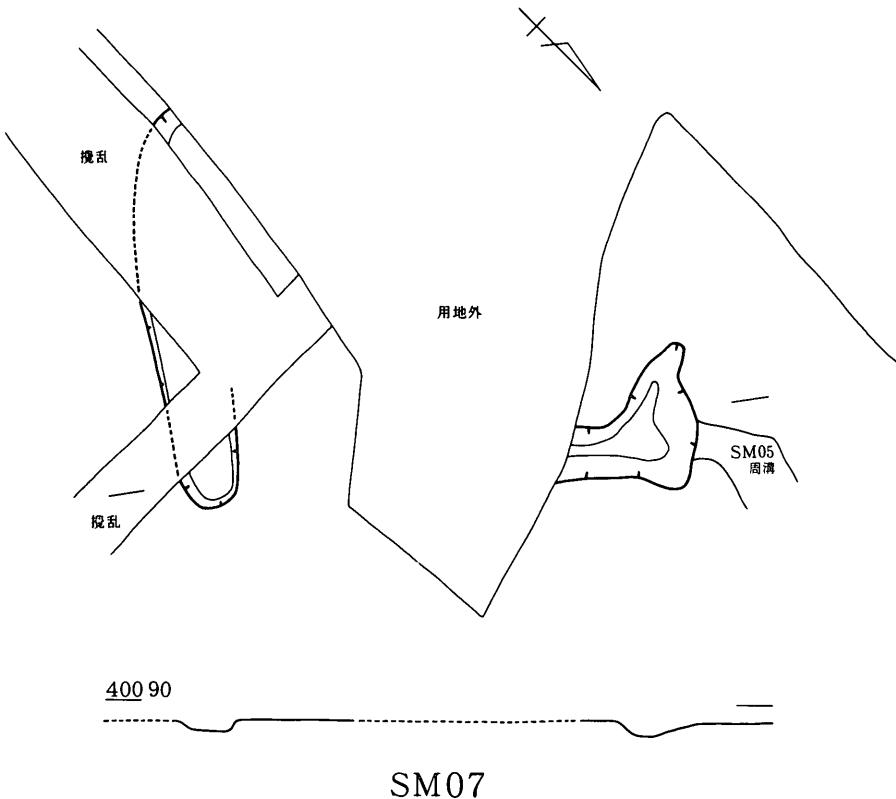
[検出位置] B U32他 [重複] S K32と重複する [調査所見] 北隅付近は撹乱が著しくかろうじて把握できたにすぎない [規模] 周溝内法-×-m、周溝外法-×-m [内法面積] - m² [形態] 方形を呈すると考えられる [主軸] N 124° E [周溝] [規模] 幅65~175cm、深さ22~25cm [断面形] 土橋北側は浅半円形、南側は浅い皿状を呈する [土橋部] 北西辺中央に配される [埋土の状況] 自然埋没 [出土遺物] 遺物は北東辺からは土師器と思われる土器小片が出土。北西辺周溝から弥生土器壺(第2図



SM05



挿図 6 SM05・SM06



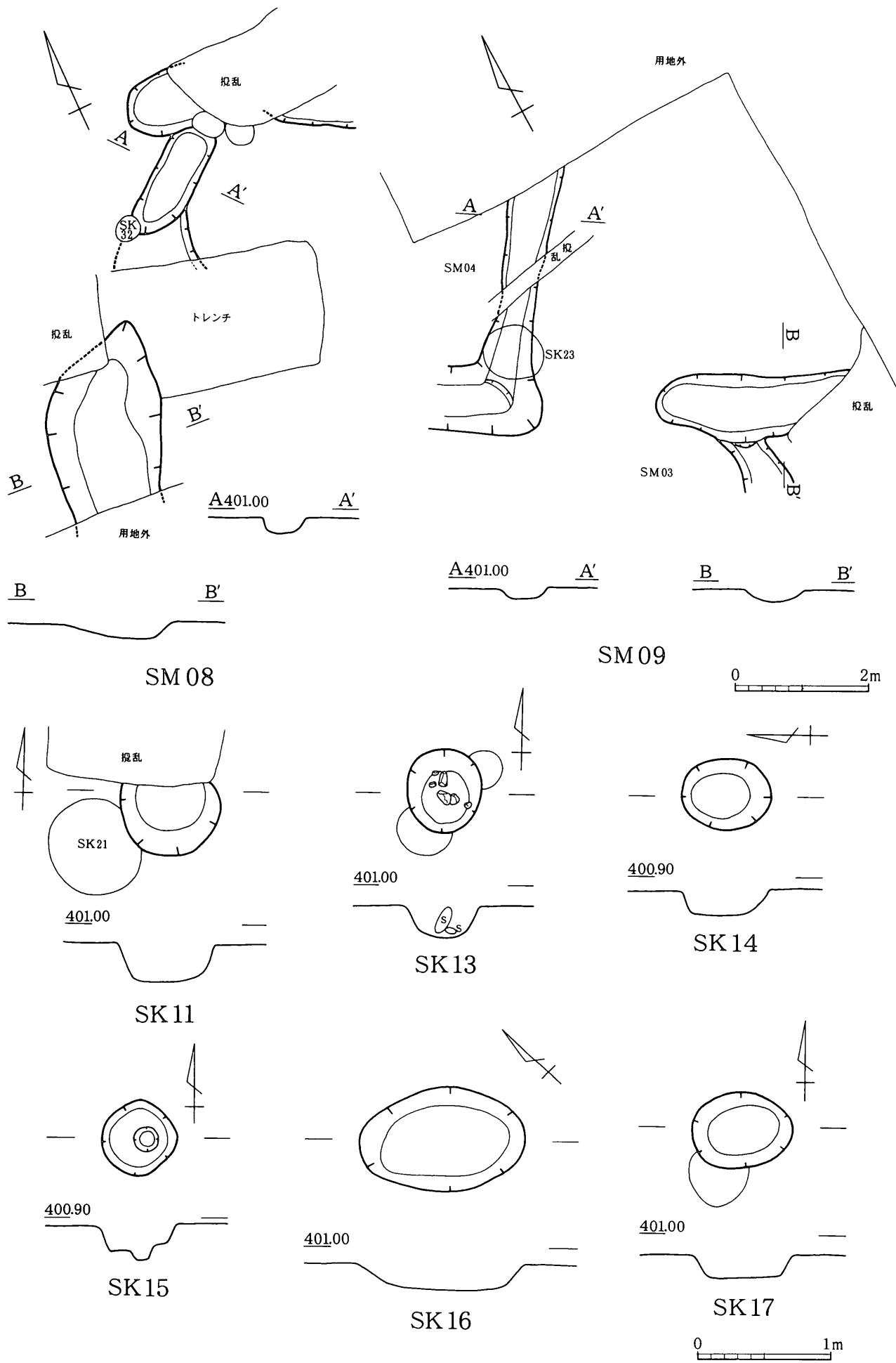
挿図7 SM07

4)・土師器甕片、石器剥片や棒状礫（砂岩）、他に縄文中期後葉土器片が混入出土【主体部】[有無]調査区外にかかり確認できず [規模]幅—×—m、深さ—cm [形態]不明 [壁]不明 [埋土の状況]不明【その他】[墳丘]調査区壁際付近は特に搅乱が著しく不明 [外表施設]なし [付属施設]不明 [時期]弥生時代後期から古墳時代前期にかけての周溝墓と考えられる。

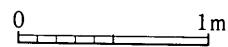
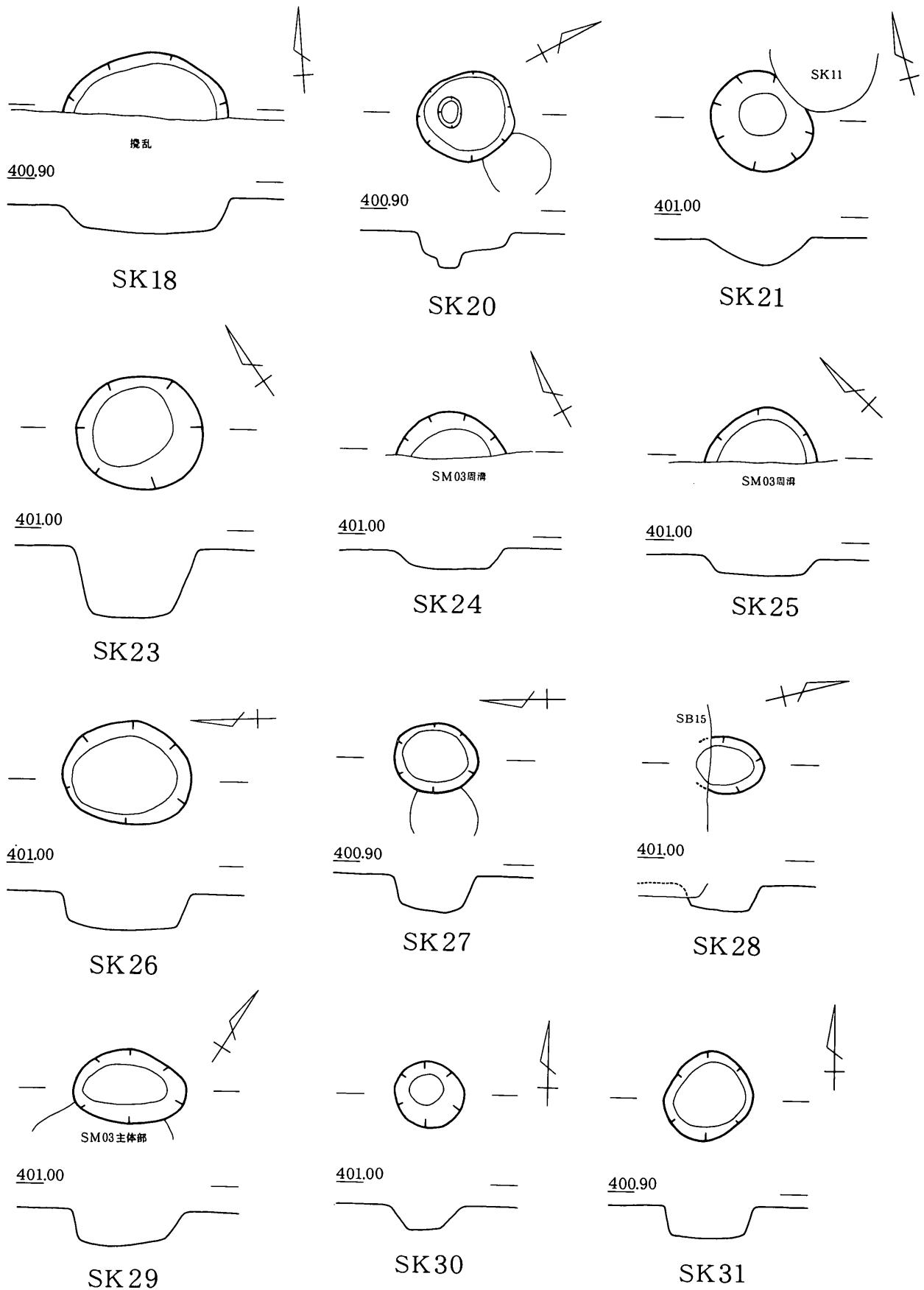
⑦ SM09 (挿図8)

[検出位置] AA32他 [重複] SM03・SM04と周溝を共有する [調査所見]大部分が調査区外にかかる。南西辺の周溝がSM03周溝から中途で分岐していること、北西辺周溝の西端部が南側にやや膨らみ東側を囲繞する意図が看取できることから周溝墓とした。SM04と同様、上部を削平されている [規模]周溝内法—×—m、周溝外法—×—m [内法面積] — m² [形態]方形を呈すると考えられる [主軸]南西辺の方向N64° W [周溝] [規模]幅50～100cm、深さ16cm [断面形]浅い皿状を呈する [土橋部]南西辺西隅 [埋土の状況]自然埋没 [出土遺物]遺物量は僅少で、弥生土器と考えられる甕片がある【主体部】[有無]調査区外にあると考えられる [規模]幅—×—m、深さ—cm [形態]不明 [壁]不明 [埋土の状況]不明【その他】[墳丘]削平を受け不明 [外表施設]なし [付属施設]不明 [時期]弥生時代の周溝墓と考えられる。

なお、SM03・SM08・SM09に囲まれた部分も周溝墓の可能性があるが、周溝の形状から墓としての区画意識はみられないと判断し、遺構としての把握は行わなかった。



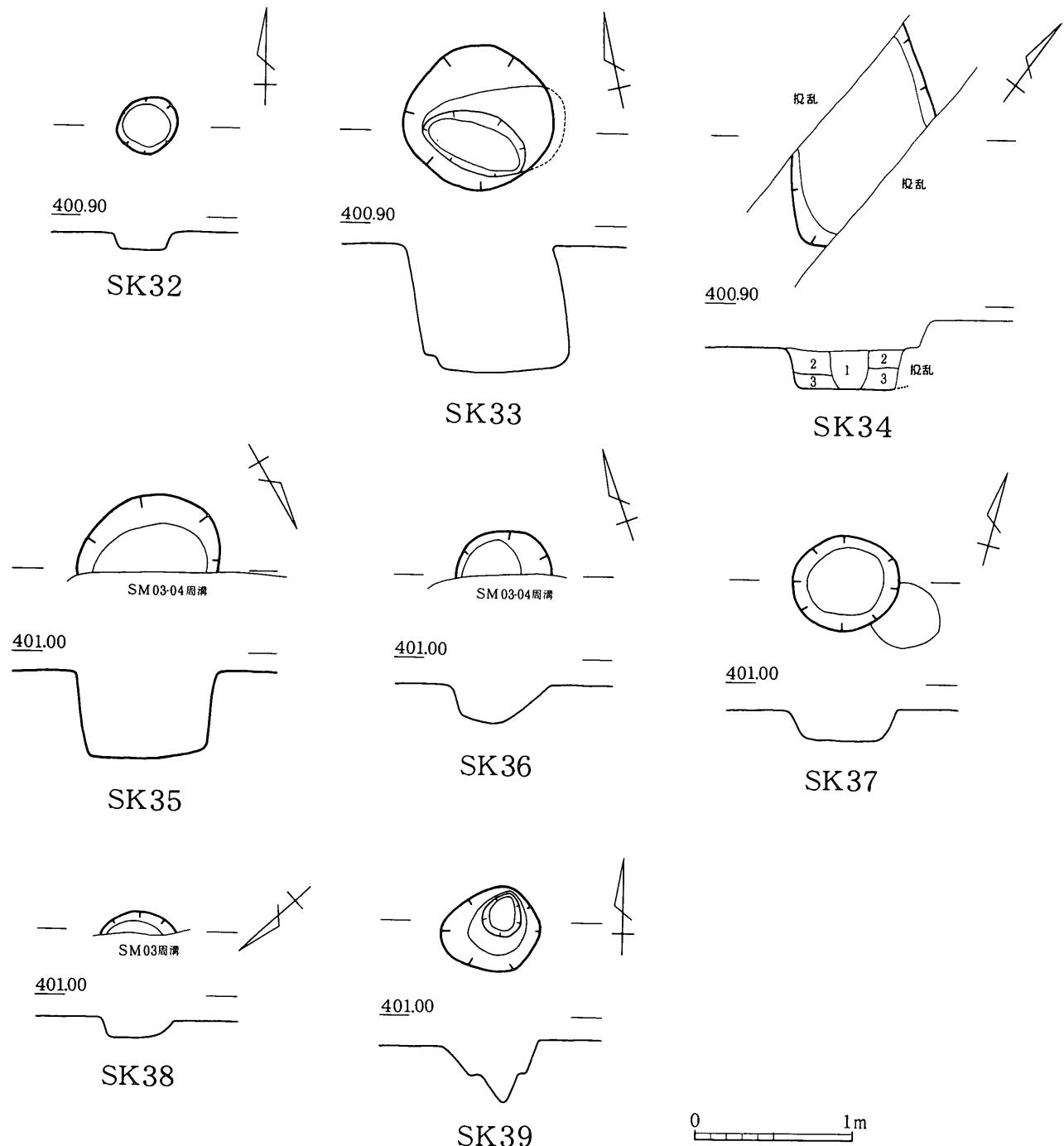
挿図8 SM08・SM09、SK11・SK13～SK17



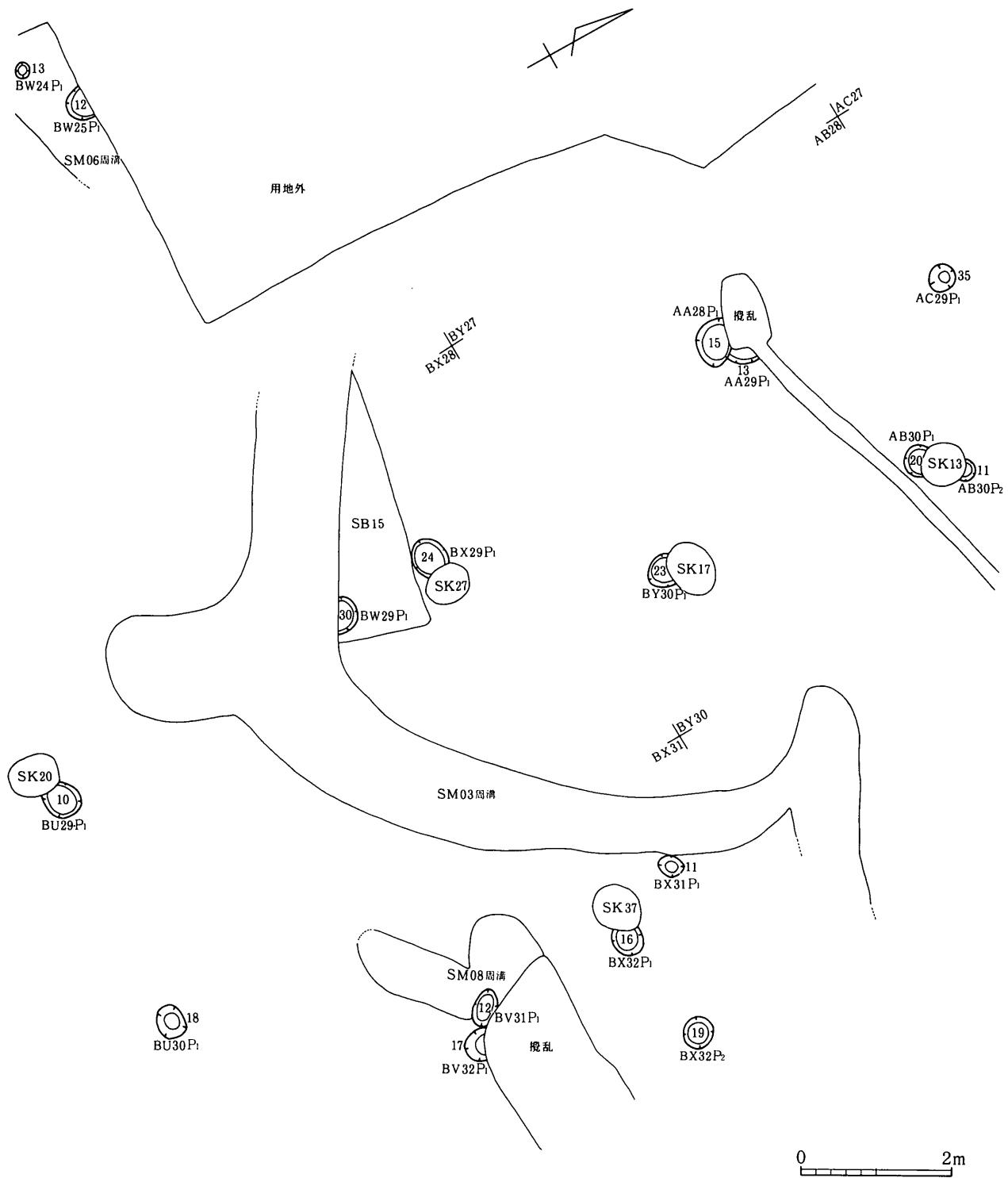
挿図9 SK18・SK20・SK21・SK23～SK31

(3) 土坑 (挿図 8~10)

小規模なものが多々、その中で遺物出土のあるものは限られる。特記されるもののみを記す。SK26からは縄文土器小片の他、硬砂岩製の小形の打製石斧（第3図15）と横刃型石器（14）が出土した。SK30・SK35からは縄文土器片が出土しているが、前者は摩滅が著しい等、いずれも時期不明である。また、SK37から土製円板が出土した。



挿図10 SK 32~39



挿図11 周辺柱穴 平面図

(4) その他（挿図11）

S M03周辺を中心に小柱穴群を検出した。松尾公民館建設地点の調査区では、中・近世の小竪穴・土坑等が調査されている。本小柱穴群も中・近世の建物址等の柱穴である可能性があるが、組み合うものではなく、詳細は不明である。

(5) 遺構外出土遺物

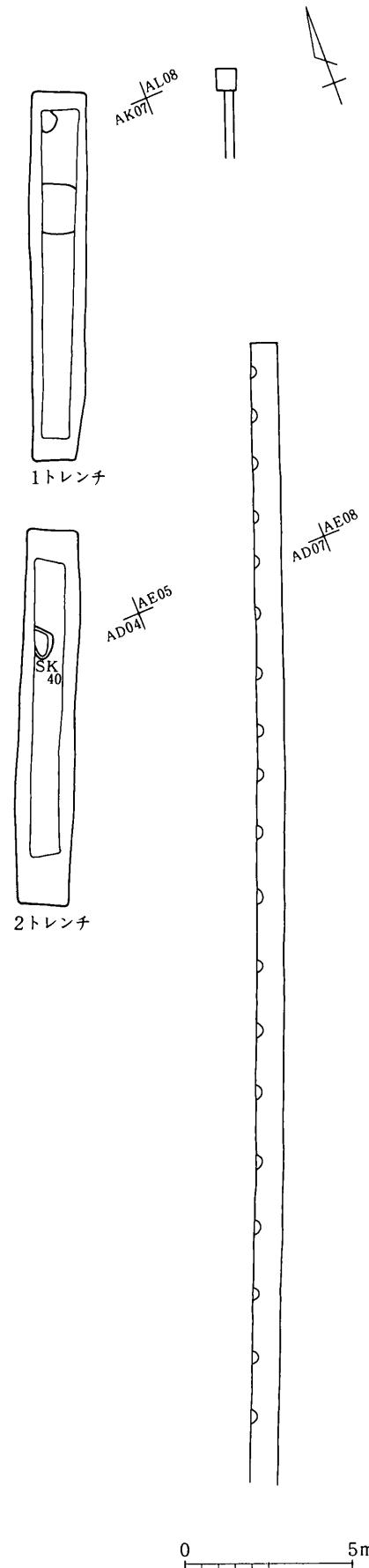
周溝墓の周溝に混入して縄文時代中期中葉の土器等が出土している（第2図5～13）。

第4節 保育園園庭地点の遺構と遺物（挿図12、第2図

14、第3図20～22）

保育園園庭地点では1トレンチで土坑2基、2トレンチで土坑1基（SK40）が把握された。SK40は不整形を呈し、一部区外にかかる。だらだらと掘り窪んでおり、内部からは土器が1個体（第2図14）と小形の打製石斧（第3図20）や横刃形石器（21・22）が出土した。縄文時代中期中葉に比定される。

1トレンチはコンクリート基礎や現代のゴミ穴等により南側半分が搅乱を受けていた。2トレンチは地表下約1.2mまで造成土が堆積し、その下部は漸移層を欠いて礫混じりの二次堆積ロームが確認された。これは1トレンチ検出面の下層と推定され、SK40もごく浅いことから、2トレンチから南側部分は既に造成により削平されていると判断された。



挿図12 保育園園庭擁壁工事地点遺構全体図

第IV章 総括

まず今次調査では、縄文時代中期中葉の遺構・遺物が確認されたことが特筆される。松尾公民館建設地点の調査では遺構外出土遺物として縄文時代中期・晚期の遺物が出土している。しかし、遺構に伴うものではなく、中期集落の存在を推定するにすぎない状況があった。今次の調査では、竪穴・土坑のみの調査でやはり竪穴住居址は確認されていないが、多くの前期・中期集落にみられる環状集落の周縁的な部分にあたることを示唆する内容となっている。具体的にこの環状集落の中心部分を推定すると、小学校校舎増築地点の北東側に求めることができる。

遺物はいわゆる下伊那型の櫛形文（神村 1986）とよばれる土器群で、僅かに藤内～井戸尻期の遺物が混じる。類例は大門町遺跡（飯田高校考古学研究会 1975）や北方西の原遺跡（伴他 1967）、白山遺跡（飯田市教委 1981）、城陸遺跡（同 2003 b）等がある。該期の資料は中期中葉末以降の資料が多い飯田市内では類例はそれほど多くなく、また集落の良好な調査例となると白山遺跡等に限られる。該期集落の立地・規模・構造について、中期後葉では「多くは広大に広がる扇状地・段丘に立地し、大規模な環状集落を形成する」のに対して、中期中葉では「山麓の扇状地～舌状台地、河川に面した小規模段丘に小規模な環状集落を形成」することが指摘されている（同前）。本遺跡で集落中心部分が確認されれば、立地の差異について見直すことも必要となってくる。

これまで松尾城遺跡では松尾公民館建設地点で弥生時代後期の方形周溝墓 2 基が調査されていたが、小学校校舎増築地点で新たに 7 基の周溝墓が調査された。この両地点の相違点をみると、まず前者は間隔をおいて疎らに周溝墓が 2 基のみ構築されているのに対して、後者は周溝を共有する形で密集していることが挙げられる。前者は土橋の位置を除けば当地方で典型的な周溝墓といいうるもので、このうち方形周溝墓 1 は墳丘に外表施設として貼り石をもっていたと考えられ、墳墓群の中心的な性格を見て取ることができる。これに対し、後者では土橋の位置も定まらず平面形も歪んでいる。周溝墓の規模は、前者で調査された方形周溝墓 1・2 はそれぞれ周溝内法で $7.0 \times 7.0\text{m}$ ・ $8.2 \times 8.0\text{m}$ を測るのに対して、後者では S M03 で $6.6 \times 6.5\text{m}$ 、S M06 で $7.2 \times 6.8\text{m}$ と大差はないようにみえるものの、S M07 は一辺が推定で 4.2m と小振りである。両調査地点が指呼の間にあるにも拘わらず、このような際だった相違点が把握されたことが一つの大きな成果といえる。

今次の調査で調査された周溝を共有するタイプの周溝墓は、ツルサシ遺跡（上郷町教委 1989）・宮垣外遺跡（飯田市教委 2000 c）・高屋遺跡（同前）・羽場曙遺跡（同 2003 a）・八幡原遺跡（同 1992 a・c）・田圃遺跡（同 2000 a）・上の坊遺跡（同 2003 d）・田中下遺跡等で確認されている。このうち八幡原遺跡・田圃遺跡・上の坊遺跡・田中下遺跡は古墳時代以降に位置づくものと考えられ、必ずしも弥生時代に限られるものでないことを確認しておきたい。

なお、方形周溝墓 S M03・S M06・S M08に挟まれた部分（挿図4、網掛部分）は、限られた調査部分のみでの即断は避けなければならないが、墓道として使われた部分の可能性を指摘できる。

飯田下伊那地域の方形周溝墓群の立地や居住域と墓域の関係については、山下誠一が整理している（山下 2001・2002）。弥生時代には集落と比較的近接した場所に墓域が形成され居住域と明確に区別

できない恒川遺跡群・松尾城遺跡・田井座遺跡・一色遺跡等と、居住域とは少し離れた箇所に墓域がある黒田垣外遺跡・ミカド遺跡・宮垣外遺跡・天伯A遺跡・田圃遺跡や小垣外・辻垣外遺跡といった2つの類型があり、古墳時代になると、前代と基本的に変わらない性格をもつツルサシ遺跡以外に、多様な類型が生じてくることが指摘されている。今回調査された周溝墓を含めて松尾城遺跡の周溝墓は山下の時期区分（山下 2001）で主体はⅡ期、一部Ⅲ期にかかるものと考えられ、弥生時代的な類型として捉えておくことが妥当といえよう。

本遺跡内で居住域が把握されているのはこれまでのところ松尾公民館建設地点に限られているが、遺跡内で上述の分布・形態・規模の差異がみられる背景には、田圃遺跡や八幡原遺跡について山下が指摘しているような複数の集落の墓域として設定されている可能性が考えられる。ただこうした複数集落の墓域成立について山下は弥生時代以降と考えており、他の要因を含めて今後検討していく必要がある。仮にその差異が複数集落の存在に起因するとすれば、小学校校舎増築地点の北東側に松尾公民館建設地点とは別集落の存在を想定することができよう。

調査の成果は以上のとおりであるが、調査によって本遺跡に関して解明されなければならない課題が浮かび上がってきてている。その中で、縄文時代中期中葉と弥生時代後期～古墳時代前期集落の追求は大きな課題であり、今次両調査地点周辺でのさらなる文化財保護の取組みが求められている。

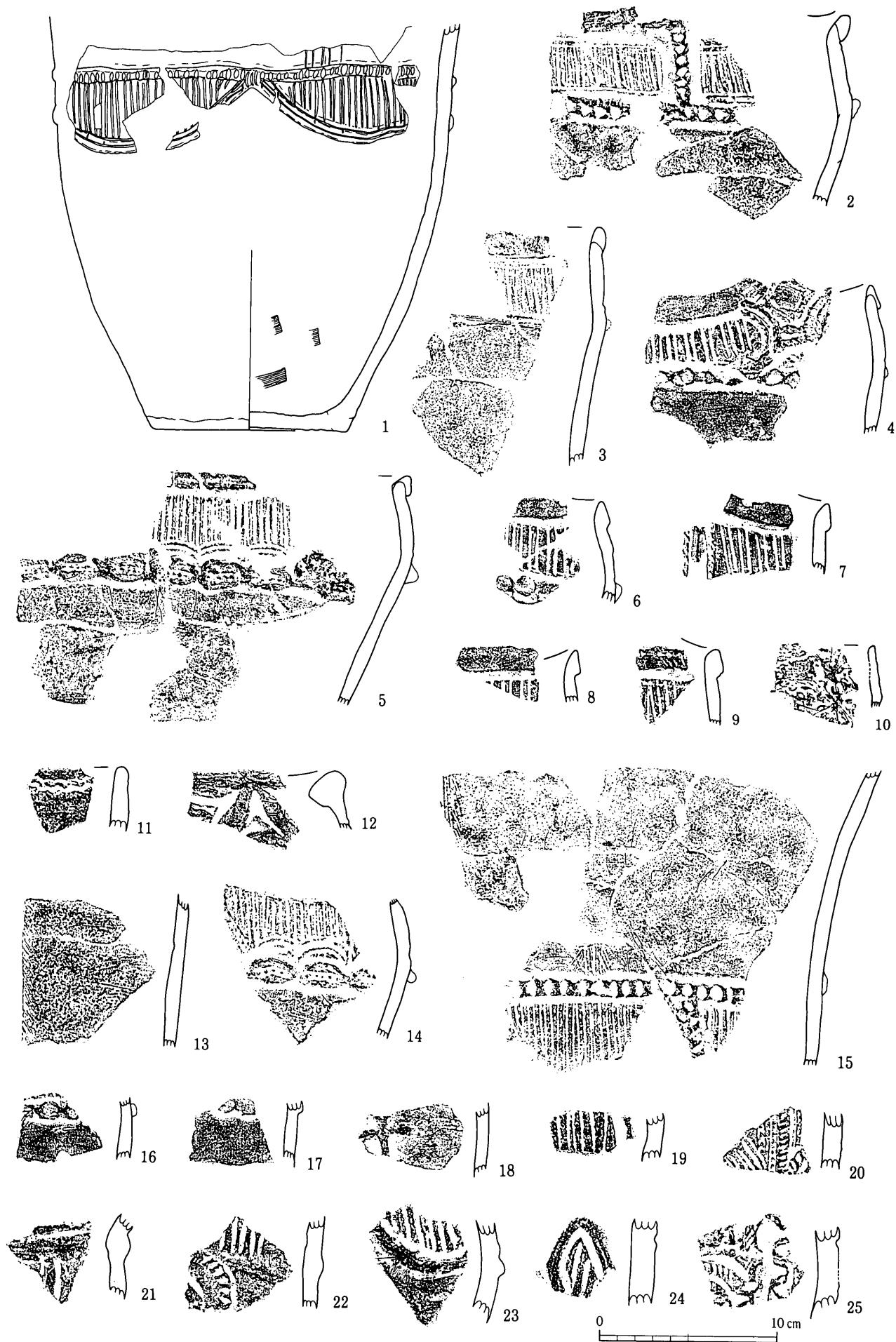
引用参考文献

- 飯田高校考古学研究会 1975 「飯田市大門町遺跡調査報告」『下伊那考古学会誌』Ⅱ
- 飯田市教育委員会 1972 『妙前大塚（3）号古墳』
- 飯田市教育委員会 1974 『松尾南の原遺跡発掘調査概報』
- 飯田市教育委員会 1976 『清水遺跡』
- 飯田市教育委員会 1978 『毛賀御射山遺跡』
- 飯田市教育委員会 1980 『猿小場遺跡』
- 飯田市教育委員会 1981 『白山遺跡』
- 飯田市教育委員会 1991a 『城遺跡』
- 飯田市教育委員会 1991b 『清水遺跡』
- 飯田市教育委員会 1992a 『八幡原遺跡』
- 飯田市教育委員会 1992b 『八幡原遺跡 物見塚古墳』
- 飯田市教育委員会 1992c 『八幡原遺跡』
- 飯田市教育委員会 1993a 『田圃遺跡』
- 飯田市教育委員会 1993b 『久井遺跡』
- 飯田市教育委員会 1994 『長野県飯田市代田山狐塚古墳の測量調査』
- 飯田市教育委員会 1996 『北の原遺跡（遺物編）』
- 飯田市教育委員会 1999 『寺所遺跡』
- 飯田市教育委員会 2000a 『田圃遺跡（Ⅱ）』
- 飯田市教育委員会 2000b 『北の原遺跡（遺構編）』

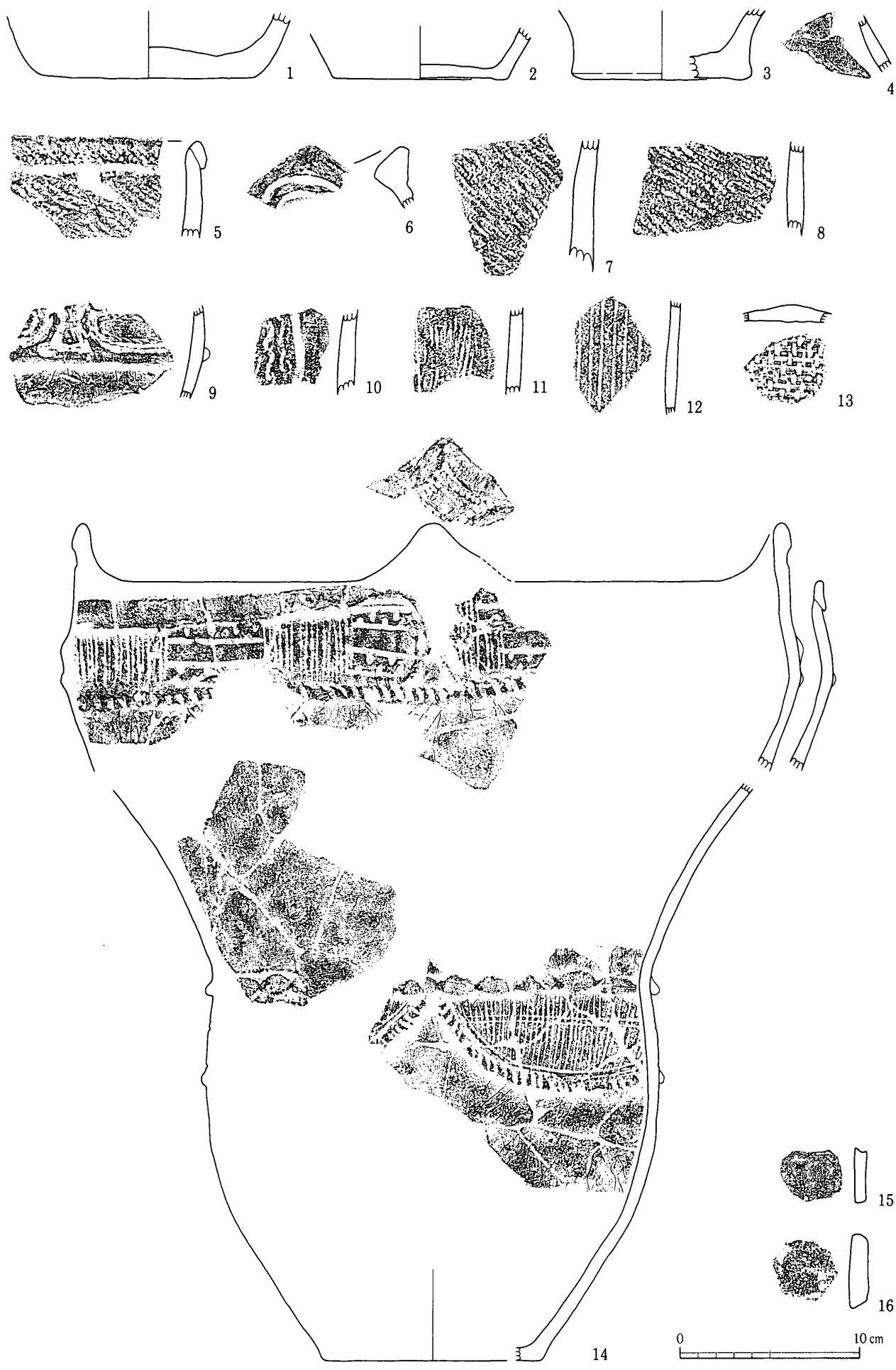
- 飯田市教育委員会 2000 c 『宮垣外遺跡・高屋遺跡』
- 飯田市教育委員会 2001a 『飯田城下町遺跡』
- 飯田市教育委員会 2001b 『妙前遺跡』
- 飯田市教育委員会 2002 『開善寺境内遺跡』
- 飯田市教育委員会 2003 a 『羽場曙遺跡・方角東遺跡』
- 飯田市教育委員会 2003 b 『城陸遺跡』
- 飯田市教育委員会 2003 c 『辻前遺跡』
- 飯田市教育委員会 2003 d 『上の坊遺跡』
- 飯田市教育委員会 2004 『上溝11号古墳』
- 飯田市教育委員会 2005 『橘山窯跡』
- 神村 透 1967 「飯田市寺所遺跡とその他の遺跡」『長野県考古学会誌』 4
- 神村 透 1986 「下伊那櫛形文土器」『長野県考古学会誌』 51
- 佐藤甦信 1982 「寺所遺跡と寺所式土器」『中部高地の考古学』 II
- 下伊那郡上郷町教育委員会 1989 『ツルサシ・ミカド・増田・垣外遺跡』
- 下伊那誌編纂會 1955 『下伊那史』 第二卷
- 下伊那誌編纂會 1955 『下伊那史』 第三卷
- 下伊那誌編纂會 1991 『下伊那史』 第一卷
- 長野県史刊行会 1981 『長野県史 考古資料編 全一巻（一）遺跡地名表』
- 長野県史刊行会 1983 『長野県史 考古資料編 全一巻（三）主要遺跡（南信）』
- 伴 信夫・宮沢恒之 1967 「長野県飯田市伊賀良一西ノ原遺跡調査報告」『信濃』 19-12
- 松尾村誌編纂委員会 1982 『松尾村誌』
- 山下誠一 2001 「飯田盆地における周溝墓の動向」『飯田市美術博物館研究紀要』 第11号
- 山下誠一 2002 「飯田盆地における周溝墓再論」『飯田市美術博物館研究紀要』 第12号
- 八幡一郎 1972 『日本中部山地に於ける縄文早期文化の研究（上）』

追構名	層	J I S 標準色票	土壤色	土性	検出位置	法寸(cm)	主軸	形状	備考
基本層序	I	造成土および旧表土							
	II	7.5YR3/1	黒褐	S i C					
	III	10YR3/3	暗褐	S i C					
S B14				S i C	BX32他	(190)×180×25		不整円形	
S B15		10YR3/3	暗褐	S i C	BW28他	-×-×12		北辺N78° W方ないし長方形	
SM03									
A-A	1	7.5YR3/1	黒褐	S i C					
	2	10YR2/3	黒褐	S i C					
B-B	1	10YR3/2	黒褐	L i C					
	2	7.5YR3/1	黒褐	S i C					
	3	10YR3/1	黒褐	S i C					
C-C	1	10YR3/1	黒褐	L i C					
	2	10YR3/2	黒褐	L i C					
SM04									
SM04・05	1	10YR2/1	黒	S i C					
	2	10YR4/2	灰黄褐	S i C					
SM04・07		10YR2/1	黒	S i C					
SM05									
SM06	南東辺	10YR4/2	灰黄褐	S i C					
	南西辺	10YR3/3	暗褐	S i C					
	北西辺	10YR3/3	暗褐	S i C					
SM07									
SM08		10YR3/3	暗褐	S i C					
SM09		10YR4/2	灰黄褐	S i C					
S K10		10YR3/3	暗褐	S i C					欠番
S K11		10YR2/1	黒	S i C	AC28	75×-×30	-	円形?	
S K12									欠番
S K13		10YR4/1	褐灰	S i C	AB30	65×55×23	N4° W	不整楕円形	
S K14		10YR4/2	灰黄褐	S i C	AB28	65×50×20	N0° W	不整楕円形	
S K15		10YR4/2	灰黄褐	S i C	AB29	60×55×20(27)-		不整円形	
S K16		10YR3/3	暗褐	S i C	AB32他	125×80×19	N48° W	不整楕円形	
S K17		10YR3/2	黒褐	S i C	BY30他	95×55×18	N81° E	不整楕円形	
S K18		10YR3/2	黒褐	S i C	BY28	120×-×25	-	-	
S K19									欠番
S K20		10YR3/3	暗褐	S i C	BU29他	70×60×13(26) N25° E		不整楕円形	
S K21					AC28他	70×65×21	-	不整円形	
S K22									欠番
S K23					AA30	90×80×51	N55° W	不整楕円形	
S K24					BX31	-×-×15	-	-	
S K25					BX30他	80×-×14	-	-	
S K26					BX29他	95×75×27	N6° E	不整楕円形	
S K27					BX29	60×50×27	N5° E	不整楕円形	
S K28					BX28	-×40×19	N71° W	不整楕円形	
S K29					BY29	80×55×26	N60° E	不整楕円形	
S K30					BW31	50×50×17	-	円形	
S K31					BV31他	65×55×23	N42° E	不整楕円形	
S K32					BV31他	40×35×12	-	不整円形	
S K33		10YR2/1	黒	S i C	AB28	95×95×80	-	不整円形	内部斜坑
S K34	1	10YR3/2	黒褐	S i C	BV27他	-×95×25	N49° W	不整長方形	
	2	10YR3/3	暗褐	S i C					
	3	7.5YR3/2	黒褐	S i C					
S K35					AA35他	(90)×(85)×55	-	不整円形?	
S K36					AB29	60×-×25	-	-	
S K37					BX31他	70×60×20	N65° E	不整楕円形	
S K38					BX31他	-×-×13	-	-	
S K39		10YR4/2	灰黄褐	S i C	AB28他	65×55×24(40)	N85° E	不整形	
S K40						90×-×7	-	不整形	

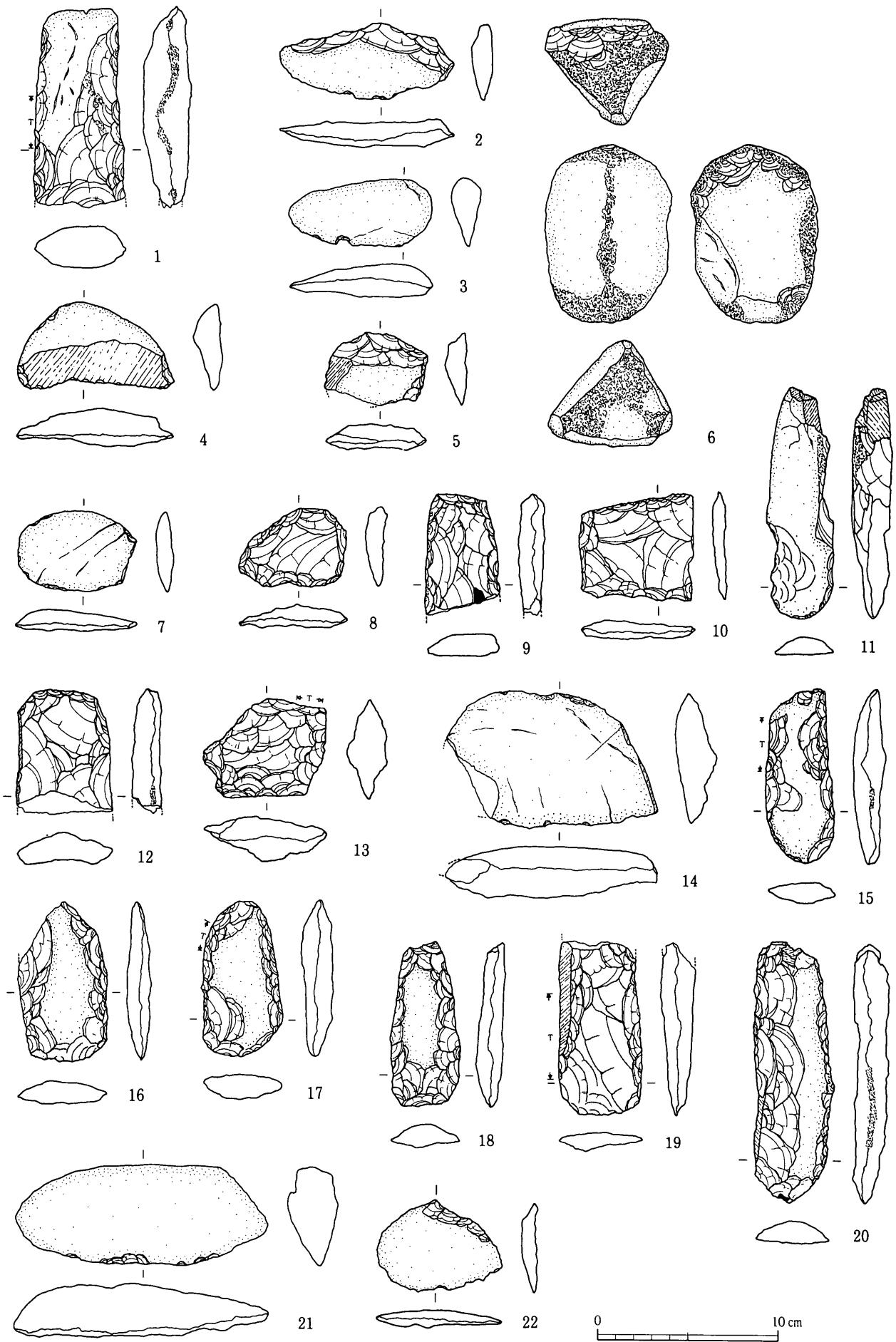
表 1 遺構観察表



第1図 松尾城遺跡出土遺物（1）



第2図 松尾城遺跡出土遺物（2）



第3図 松尾城遺跡出土遺物（3）

図版No.	遺構名	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
1	S B14	打製石斧	硬砂岩	(109)	50	27	(194)	刃部欠損
2	S B14	横刃形石器	緑色岩	41	96	15	54	
3	S B14	横刃形石器	硬砂岩	37	79	17	47	
4	S B14	横刃形石器	硬砂岩	47	87	21	67	
5	S B14	横刃形石器	硬砂岩	40	57	14	29	
6	S B14	敲打器	緑色岩	98	71	56	592	
7	S B15	横刃形石器	硬砂岩	44	66	12	37	
8	S M03南東辺周溝	横刃形石器	硬砂岩	43	60	13	29	
9	S M03・06周溝	打製石斧	緑色岩	(67)	42	15	(66)	刃部欠損
10	S M03・06周溝	横刃形石器	珪質岩	59	64	11	50	
11	S M03南西辺周溝	打製石斧	緑色岩	127	37	22	(126)	
12	S M06南東辺周溝	打製石斧	硬砂岩	(69)	53	18	(85)	刃部欠損
13	S M06南東辺周溝	横刃形石器	硬砂岩	55	68	25	83	
14	S K26	横刃形石器	硬砂岩	76	(117)	29	(227)	一部欠損
15	S K26	打製石斧	硬砂岩	97	38	12	76	
16	遺構外	打製石斧	硬砂岩	(87)	50	14	(68)	基部の一部を欠損
17	遺構外	打製石斧	緑色岩	85	45	18	96	
18	遺構外	打製石斧	硬砂岩	91	38	14	63	
19	遺構外	打製石斧	緑色岩	(95)	46	20	(132)	基部を欠損
20	S K40	打製石斧	緑色岩	144	45	20	166	
21	S K40	横刃形石器	硬砂岩	55	140	30	244	
22	S K40	横刃形石器	硬砂岩	51	70	10	24	

表2 石器観察表

写 真 図 版



調査区全景（東から）



同上（南から）



S B 14

図版 2





S M05他



S M06

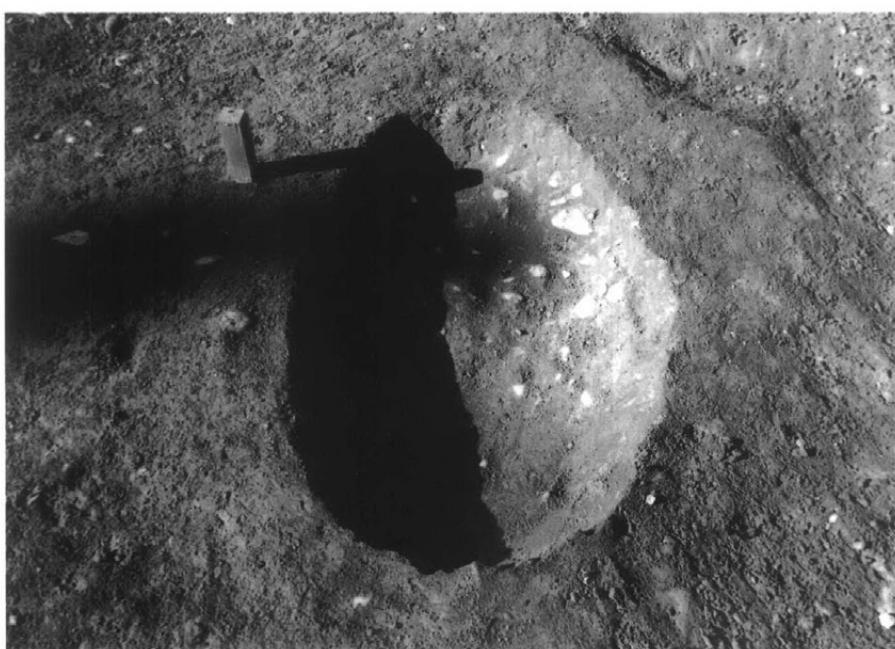


S M08

図版 4



S M09



S K 16



S K 17



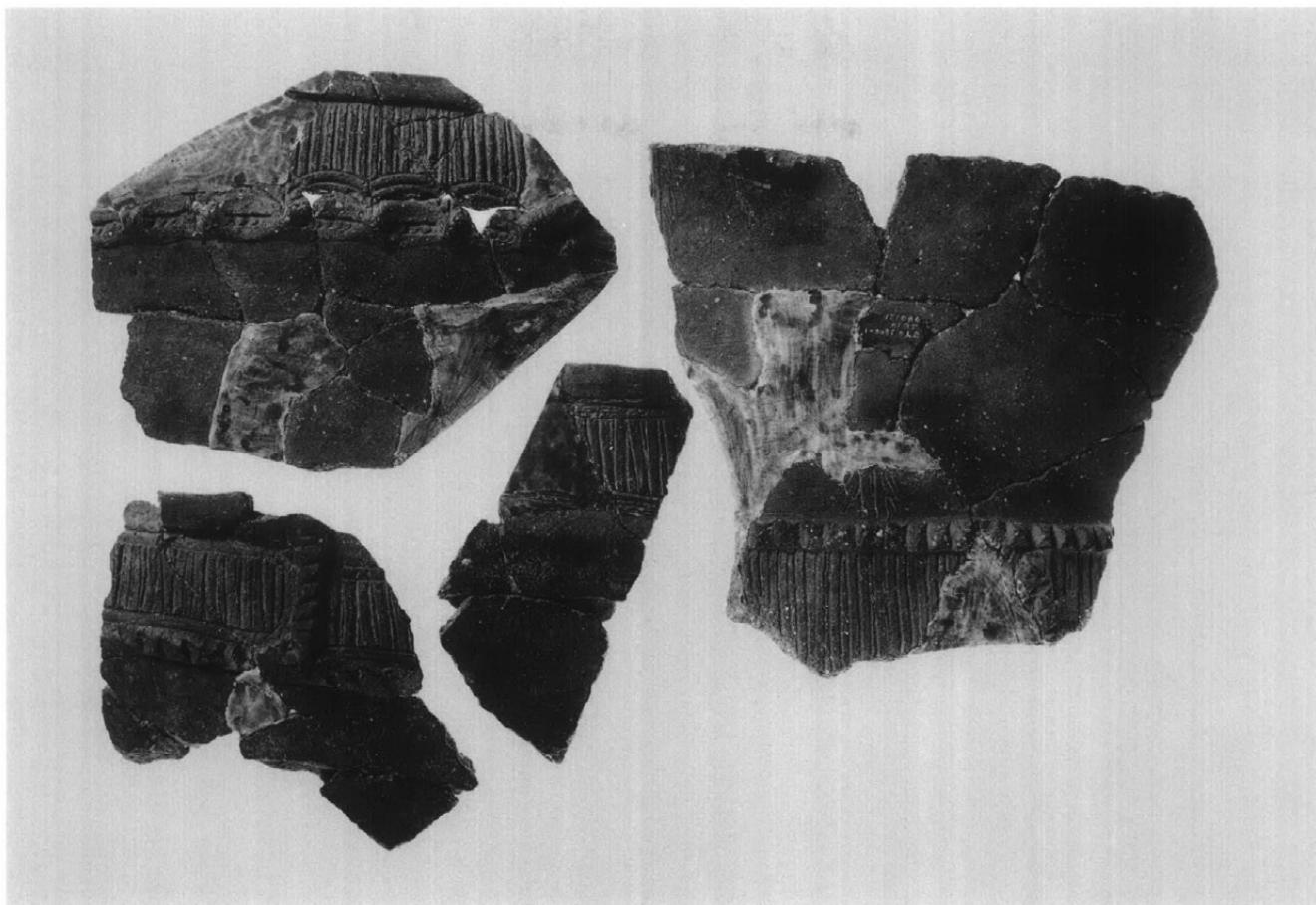
図版 6



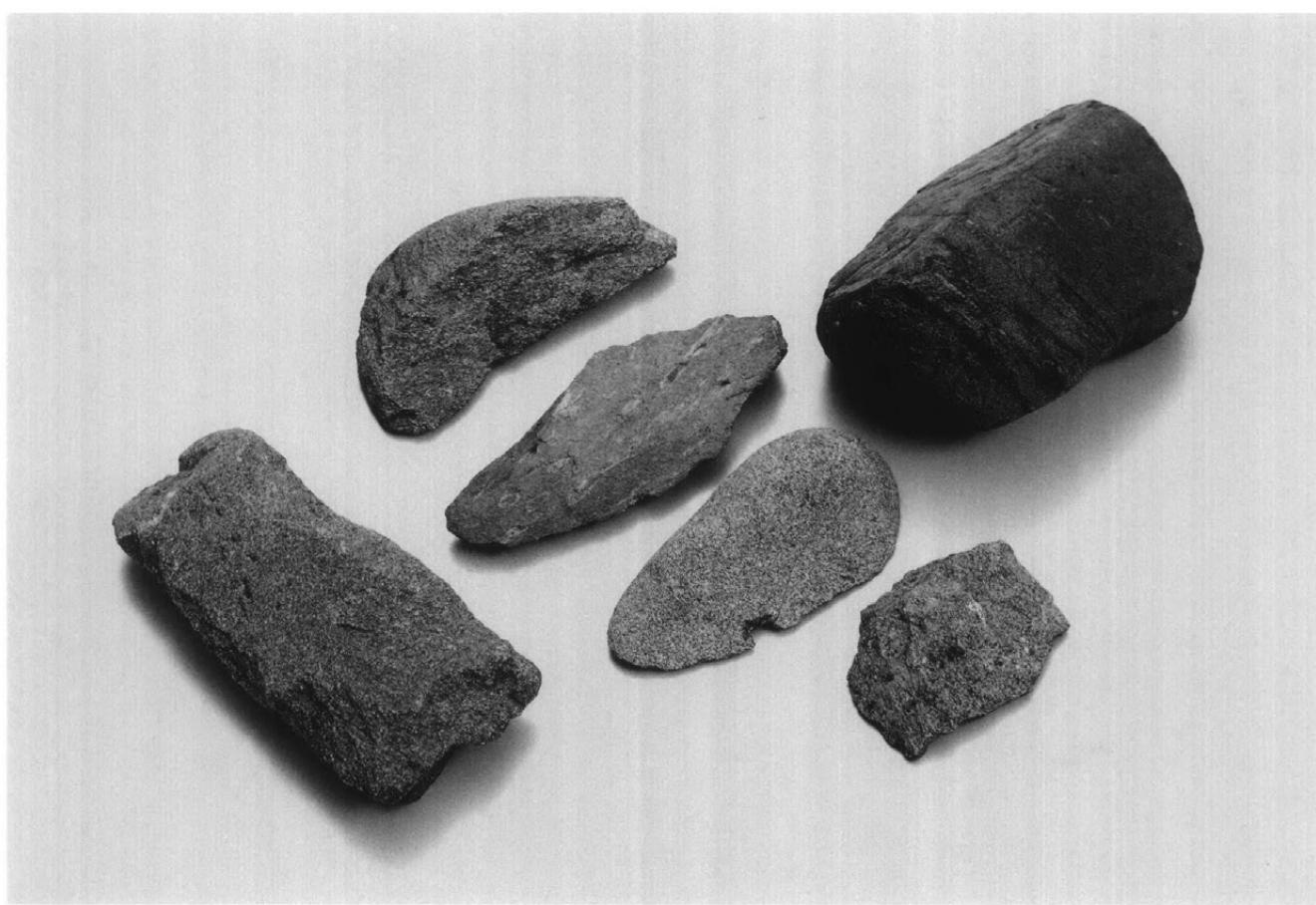
発掘作業風景

S B 14

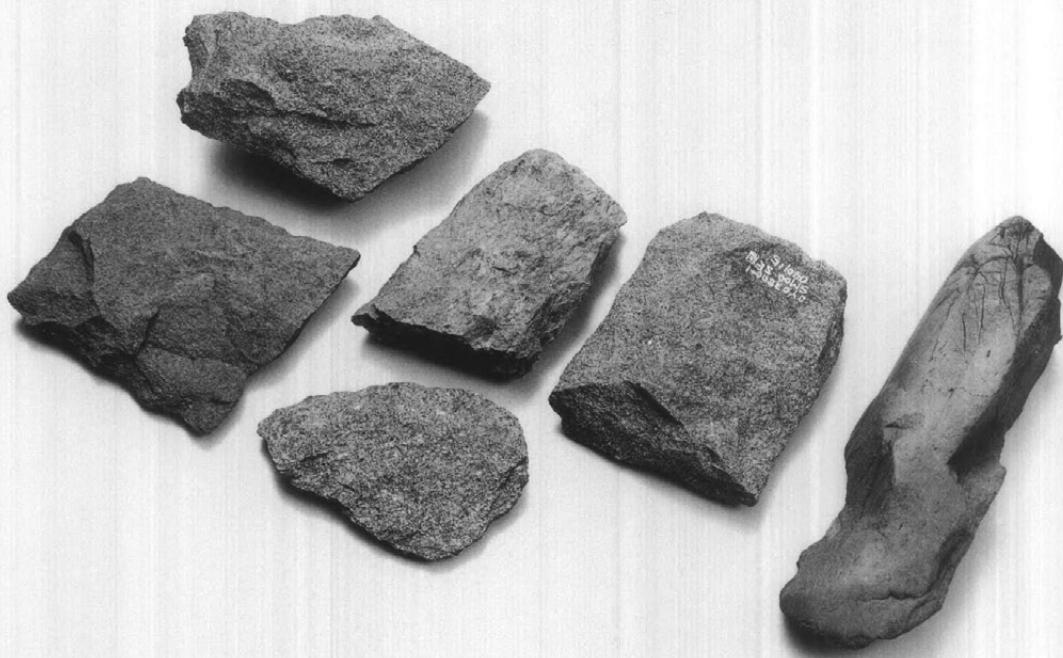




S B 14



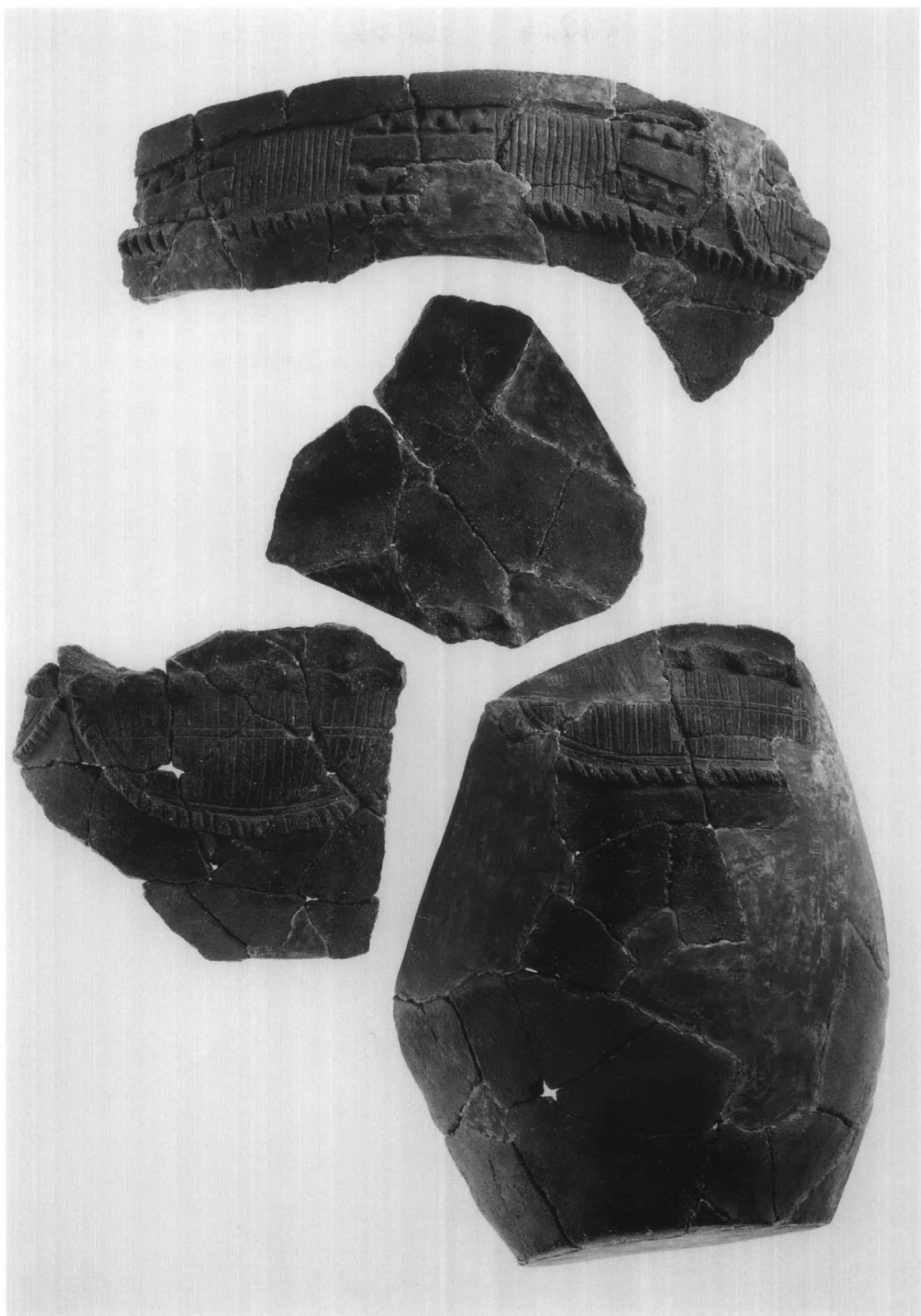
同上



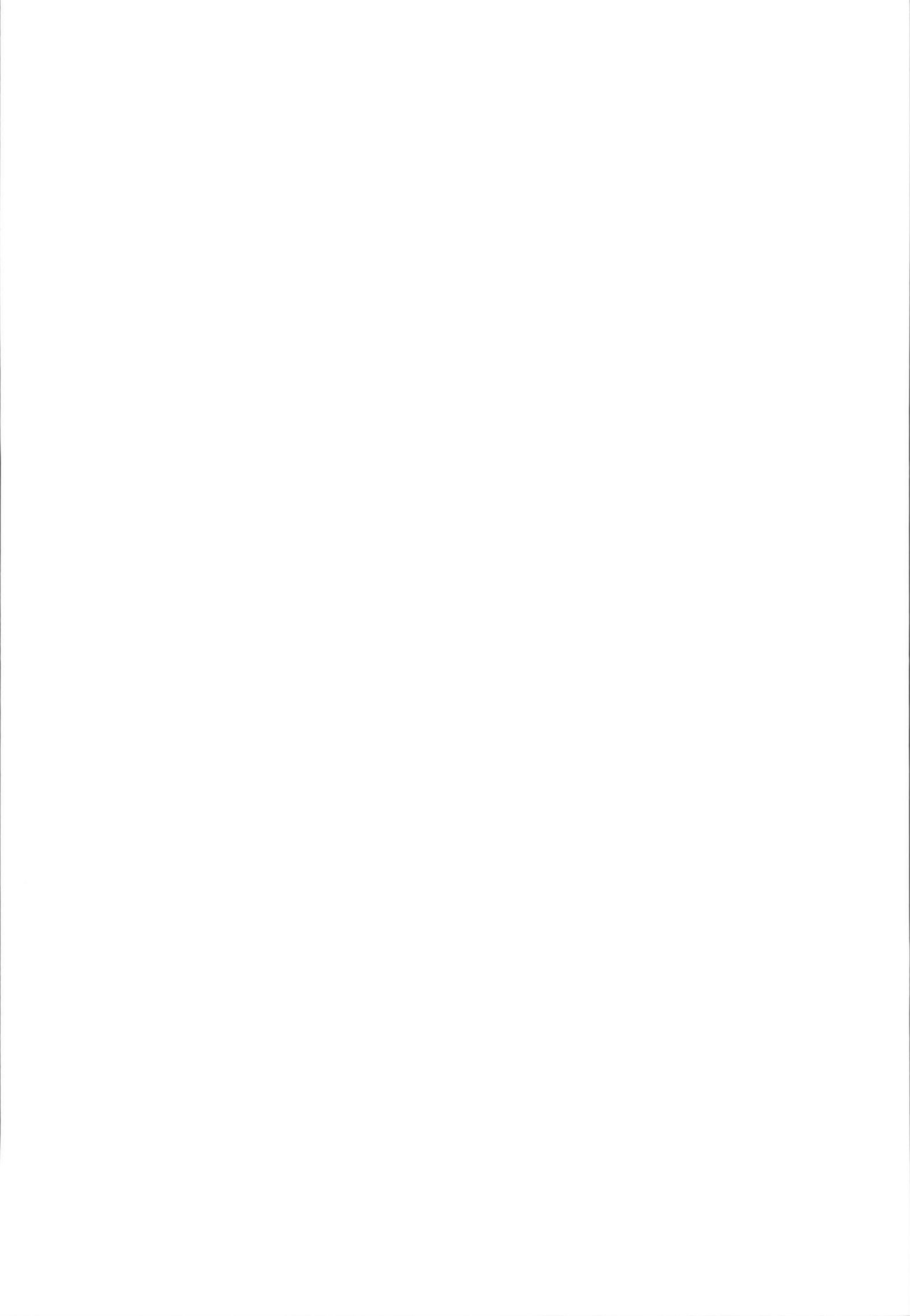
S M03 · S M06



遺構外



S K 40



報 告 書 抄 錄

ふりがな	まつおじょういせき						
書名	松尾城遺跡						
副書名							
巻次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	馬場保之						
編集機関	長野県飯田市教育委員会						
所在地	〒395-8501 長野県飯田市大久保町2534番地 Tel. 0265-22-4511						
発行年月日	平成17年3月						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
まつおじょういせき 松尾城遺跡	飯田市 松尾城 3800-1	20205	35° 29' 30"	137° 50' 53"	平成16年 1月7日 ～ 1月21日	213.7 m ²	小学校校 舎増築工 事
	飯田市 松尾城 5155	20205	35° 29' 30"	137° 50' 56"	平成16年 10月22日	34.0m ²	保育園園 庭擁壁工 事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
まつおじょういせき 松尾城遺跡	集落址	縄文時代 弥生時代後期～ 古墳時代前期	竪穴 2基 方形周溝墓 7基 土坑 26基	縄文土器 石器 弥生土器 石器	弥生時代後期か ら古墳時代前期に かけての周溝を共 有する方形周溝墓 群が調査され、墓 域の広がりがある 程度把握された。 また縄文時代中 期中葉の集落域の一 画にあたることが確 認された。		
	集落址	縄文時代	土坑 1基	縄文土器 石器	縄文時代中期中 葉の集落域の一画 にあたることが確 認された。		

まつ お じょう い せき
松 尾 城 遺 跡

平成17年3月発行

編集・発行 長野県飯田市大久保町2534番地
長野県飯田市教育委員会

印 刷 龍共印刷株式会社
